
詠夕鈴

おもかくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詠夕鈴

【Nコード】

N4587I

【作者名】

おもかぐら

【あらすじ】

東方の二次創作小説。

紅魔館の門ごと外の世界に放り出された“紅 美鈴”と現代に暮らす少女“詠”の物語。

元はニコニコ動画に投稿していた作品です。サイトにて検索をすれば動画の方でも見られます

一話

門が在った。

それは、古めかしく中世のようなデザインで。私の身の丈よりも何倍も大きな鉄の格子がそびえ立つ。

雨ざらしにされたであろう痕跡は見せつつも脆さは見せないその堅牢さは、在るだけで威圧を与えるかのようだった。

そしてその堅牢な門の前には女性が一人。

長い綺麗な紅髪を長身に垂らし、緑の中華服に帽子を被った姿。その薄手の服が括れた腰のラインをつくり、その上には布が張り裂けそうなほどの……。

そう巨乳。

その巨乳チャイナが門を通ろうとする私を大仰に威嚇していたのだ。

詠夕鈴

門へと近づいた私に対して女性は仰々しく腕を広げて通せんぼをした。

「おおつと人間、ここから先に通すわけにはいかないよ！」

自信のある余裕の笑みでこちらを見据える。何故だろうかその仕草に陳腐な滑稽さはなく覇気というものがある。

そしてふと、何に気づいたのか女性は私の服装を珍妙そうにしげしげと眺めた。

「あれ？　またしても見慣れない服だけど……一応人間ですよね？」

「紛うことなく人間よ。私が猿にでも見えるの？」

「まあ人間ならいいんです。いやあ、最近は一見人間のような妖怪もいれば妖怪みたいな強さの人間がいますからねえ」

「そんな人間がどこに居るのやら」

「それはともかく、悪いことは云わないからこの紅魔館には入らないほうがいいですよ、特に人間は」

「こつまかん？」

耳慣れない単語だ。私は首をかしげながら記憶を辿るが、このあたりにそんな建物は無かったと思う。

「まあいいや。それより、人の趣味にとにかく言うつもりは無いんだけど、すごい格好してるのね……」

その服装は薄手のチャイナ服、対する私はコートを着込むくらいだ。自分の吐き出す息も白い、何を隠そう年の暮れも近づく年末。寒空の下でチャイナ服など狂気の沙汰と云わざるをえない。

「そうですかね、たまにはズボン履きますけど。すごい格好ってほどですかね？ 皆だいたい好き放題な服着てるじゃないですか。寒い中、脇を出して春探しに行くような巫女もいますし」

そうは云うが彼女のは十二分にすごい格好だろう。よく見ると緑を基調としたチャイナに合わせた緑色の帽子、その帽子には星の飾りがあり“龍”などと大層な文字が刻まれている。その無闇に画数の多く格好のいい漢字をみて頭の悪い男子が付けていそうだと無礼ながらに思う。

「まったく、学校も新しい用務員さん雇ったなら教えてくれてもいいのにね」

誰に云うでもなく、言葉を漏らすと、何故か女性は首を傾げてみせる。

「がっこう？ ようむいん？」
「ん？」

どうも会話に食い違いがあるのだろうか、女性の頭の上に見えない疑問符が浮かんでいる。

もしかして用務員ではないのだろうか。改めてみれば用務員にしては些か美人過ぎるし何より生徒である私の登校を阻止する理由が分からない。

視線を女性から門へと移す、門は様変わりしたがその鉄柵の先に見える景色はいつもの校庭と学校。

私が毎日通う女子高がそこにはある。だが、門が違つ。もしかしたら工事をしたのだらうと頭の中で新たな答えが浮かぶ。
「もしかして、この門とか貴女が工事したの？」

「……へ？」

私が女性の後ろを指し、女性が振り返る。学校と校庭と門、それらを視認したであらう女性の身体が強張つた後に硬直。
そのまま、数秒ほど時間が停止した。

「ええええええ！！！」

女性は音を立てて門の鉄柵を両手で掴み、その先にある学校と校庭を啞然と見つめる。

「どこですかここ！」

「だから学校。女子高っ！」

申し遅れることになったけれども、私は単なる女子高生。

現代社会の狭間に今日を生きる至つて普通の少女。幻想郷なんて“げ”の字すらも聴いたこともない。

強いて云うのなら、早起きができる程度の能力しかいたただ人間。

その日も私の通う女子高に朝一番で向かつただけ、ただそれだけ

のことだった。

女性の絶叫から十分ほど。さて、どうしたものだろうか。

チャイナ服の女性は、先ほどまで慌てふためいていたが、今は可愛らしく体育座りで落ち込んでいる。

対する私は門が開かない学校には入りようがないので、見知らぬデカイ門の前で立ち往生。

視線を上げて開かない門を改めて観察してみる。元は2メートルほどのコンクリートの塀が敷地を囲み、寂れた両開きの門があったのだが。今やその門はふたまわりほど巨大化して装飾豊かな本物の威厳を放っている。門が大きくなったということは当然、幅も変わっている。

塀とどうやって繋がっているのか視線を移すと接合部の塀は見た事もないほど美しく切断されており、隙もなく新しい門がそこに繋がっている。まるでブロックのおもちゃでパーツをそのまま移植したかのような美しさであったが、その調和の無さは無様と形容するしかない。

視線を正面に戻して格子の向こうに見える時計を確認する。そろそろ人が来る時間になる、このままチャイナ服の彼女を誰かが見つけたら、もしかするまでもなく騒ぎになるだろう、はたまた警察が

来るかもしれない。それは第一発見者である私にとっては関係ないのだが……だが。

「……もう」

踏ん切りのできない自分に腹が立つて思わず声が出る。

事情は分からないしこの状況は理解すら出来ない。しかし、困っている人は助けるのが人の常識だ。見た限りでは悪人では無さそうだし問題もないだろう。

「ねえ、そのチャイナさん。とりあえず寒くないの？」

私の声にチャイナ服の女性が不安を抱えた顔を上げてくれる。落ち込む前の勇みようからは想像も出来ないくらいに萎れてしまつて小動物のようだ。

「ちよつと寒いですけど慣れました……」

女性のチャイナはスリットは入ってるわ生足だわ、忌まわしいほどに胸が強調されているわ。スタイルと容姿は一級品で羨ましくも妬ましい。

「まったくもう、慣れたつて云つてもね。見てるこっちが寒いわよ」
コートを脱いで女性の肩にかけてあげる。チャイナにコートは少しミスマッチだがそれを良しと錯覚させてしまいそうなのが美人の恐ろしいところだった。

「ほら、これ着て。事情は知らないけど。人が来ると騒ぎになるし、近くに公園があるからそこで話そう」

「あ……はい、ありがとうございます」

女性の手を取つて立たせてあげる。手を引きながら公園へと歩き出す。

そしてその手を引きながら私は驚いていた。それは握った彼女の手の感触。女性のような軟らかい手とは少し違う、良く鍛えられたしなやかさを持った手。その手は私に恐怖をもたらす物ではなく少しドキドキとした高揚感を与えてくれた。

「貴女、迷子なんですよ？」

「え、ええ。一応そういうことになるんですかね？」

「ここが何処かも判っていない様子だったけど。それでも迷子じゃない？」

「……迷子ですね」

首をうな垂れて落ち込んでしまう。大人びた見た目と違ってその素直過ぎる彼女の姿が滑稽で仕方ない。

「迷子の子供は拾ったことあったけど。こんな大きな迷子は初めてよ。どうやってここに来たとか、せめて住んでた住所とか分からない？」

「どうやって、とかは分からないですよ。徹夜で立ってたらいつのまにやら……」

「住所は？ 近くなら送ってあげれるんだけど遠いと難しいかもね」

「えーっとその“幻想郷”とか“紅魔館”って聞いた事あります？」

「全然。まったくさっぱり聞いたこと無いわね」

まるで耳にしたことのない単語ばかりだ、薄々感じていたが様子だけでない彼女の言動に只事じゃないという確信だけは持てた。

実際のところ彼女が只のコスプレ好きなら事は簡単だったんだろ
うな、と自分に対して苦笑を漏らす。

「あの訊いてもいいですか？」

「なに？ チャイナさん」

「チャイナ……。あの、貴女の名前を訊いておきたいんですが」

彼女の言葉にそういえば名前の事を失念していたと思い出す。

「え？ えっとね……」

本名は止めておこう。只事じゃないんだし後腐れは無いほうがいいと私の脳が答えを出す。

「じゃあ、少女Aということにしておいて」

「エイ？ じゃあ詠さんと呼べばいいですね」

「まあ何でもいいけど……。それよりお姉さんの名前は？」

「私ですか？ 私の名は紅 ほんめいりん 美鈴。紅魔館の門を預かる門番です」

エヘンといった様子でデカイ胸を張るがその自信が逆に不安を煽るのは何故だろうか。

彼女は門番とは云うが。まったく、どこの誰がこんなのを門番にしたのやら……

「くちゅん！」

「お嬢様？」

主人の口から聞こえたくしゃみに“十六夜 咲夜”は足を止める。ティータイム、いつものティーテーブルに座る自分の主人“レミリア・スカーレット”がくしゃみをしたのだ、吸血鬼ともあるう主人がくしゃみをするなどと一体何の冗談かと思ってしまうくらいだ。気を取り直して。咲夜はトレイに置かれたカップを手に主人の前に置く、慣れた動作でその中には生きた風味を漂わす自慢の紅茶を注ぐ。

そしてその横には紅い血の入ったミルクピッチャー。いやこの場合は“ブラッドピッチャー”と云うべきなのだろうか？ そんな要らぬ想像をしながら咲夜は準備をした。

「私がかくしゃみをするなんてね」

「噂でもされたんでしょうか」

「さて、アテが多すぎて見当がつかないもの。そんな事より、門は

どうなったの？」

「はあ、修復も不可能ではないんですが迂闊に触っていいものか。犯人の目星も付いてはいるんですが……」

咲夜は窓辺に立ち眼下に門を見る。その門は昨夜までの紅魔館の門ではなく造りも簡素な小さい門になってしまっている。ついでにそこには居るべき門番までもが居なくなっていた。

「他に居ないわ。それにしても居場所が分からないのはどうかして欲しいわね」

「はい……」

不甲斐ない自分を悔いて僅かに視線を落とす咲夜。気を取り直したその視線があがる頃、レミリアの正面の席にその“犯人”はすでに居た。

「はあい、お呼ばれしたから来たわよ」

いつの間に着席したのかと驚いて咲夜が確認すると。彼女の姿は上半身だけ、レミリアの正面の空いた席にまるで座っているかのような高さでスキマが展開してそこから姿を現しているだけであった。無礼な客人であり今回の事件の容疑者の登場に咲夜は語彙を強めて切り出す。

「ちよつと……人の屋敷に入るときは門をくぐって貰えないかしら」
懐のナイフを確認しながら警戒を強める。対する“八雲 紫”はその警戒を知っても知らぬ様子で語る。

「いきなりねえ。わざわざ謝りに来たのよ？ 此方としては感謝して欲しいくらいなんだから」

「悪びれも無く。よく云えるわね」

苛立ちを抑えながらも暇な手でナイフを弄ぶのを止めはしない。

「念のため確認するけど、門番と門は貴女の仕業？」

「休暇をとってもらったのよ。いいじゃない、偶の休みくらい。下の者は気遣ってあげなきゃだめよ？」

「狐を虐待寸前までこき使っている貴女が云う台詞なのかしら」

「あら、式神は別よ」

まどろっこしい。“止めて”それでもって“投げよう”か、弾幕ごっことで“吐かせて”“直させた”ほうが手っ取り早いかもしれない。咲夜がそう思ったときだった。

「咲夜」

レミリアは茶番を律するようにわざと音を立ててソーサーにカップを置く。

「……」

その意図を察し、咲夜は無言で一步下がる。それを確認して代わりにレミリアが話し始める。

「結界の修復とは耳にしていたけれども。失敗したのね」

「ちよつとだけよ。ちよーつと間違つて門と門番ごと幻想郷の外まで小旅行しちゃったの」

「で、いつ戻るの？ あんなのでも居ないと困るのだけれど」

「困るのかしら？」

その言葉にレミリアは僅かに逡巡する。その次の瞬間であつた。

館の外、門のほうから震えるような轟音が響く。

レミリアが窓の外へ視線を送ると星型の弾幕が僅かに見えたので視線を戻す。その場に居合わせる3人全員がアレは“白黒”の仕業なのだと理解していた。

いまの出来事に門番の居ない現状と門番の居た時とどれだけの差異があるのか……。

「で、困るのかしら？」

頭の中から出てきた“困らない”という答えにレミリアのカップに添えた手が止まっていた。

「……」

レミリアは不本意ながら咲夜に目を配せるが彼女も“無理”と語らぬ口で語っていた。

「んー？」

嫌らしい笑み、という言葉を具現化するとこの女の笑みになるのである。その言葉通りの笑みがレミリアを捕らえていた。

茶番だ。レミリアはそう思ったが、その茶番がこの様だ。
「体裁」

短く切り返すと紫は満足そうに鼻で笑う。

「あら、可哀想に。動かなければ、もしくは気付けば今夜には戻るはずよ。じゃあね」

飽きたのであろう。紫は云うことだけを言っ**て**ビツクリ箱のおもちゃの如くスキマの中へと消えていった。

「申し訳ございません……」

「無茶だったのは承知よ、それよりも無茶だということが屋敷の主として頭の痛い話ね」

気を取り直そうとレミリアはカップに口をつけるが冷め始めたその味にゆっくりとソーサーの上へと戻した。

「私としても頭の痛い話です……」

何も言わず、しばらく沈黙が部屋を包み込む。

いつものように図書館の方が騒がしかったが2人はソレに関心を向ける気にはならなかった。

学校から家の間にある小さな公園、当然のように早朝の公園に人氣はなく。そこにあるのは塗料の剥がれたブランコと滑り台と冬の朝特有の心地よい肌寒さだけだった。

私と美鈴は公園に着くと子供用のブランコに座って話をした。当然、大人には一回りサイズが小さく膝を立てるようにして足が着くくらいだった。そして、寒さに軋む鎖の音を聞きながら美鈴は幻想郷について語ってくれた。彼女が人妖が住む幻想郷から来たということ、そして彼女が紅魔館という屋敷に勤めていたということ。それは聞きなれない単語に夢物語の山だった。

「幻想郷……ねえ」

ため息を吐き出すかのように私は言う。公園の先、道路横の歩道を制服の生徒が走り去っていった。気がついて携帯電話で時間を確認するともう授業が始まりそんな時間になっていた。

「にわかには。いや、にわかでなくとも信じられない話じゃない？」

「そうだと思います。ですが、私は何としてでも紅魔館に戻らねばならないんです。私がこんな所でサボっていたと咲夜さんに知れたとなれば……ああ、恐ろしい」

美鈴はガタガタと大仰な仕草で怯える。よほど咲夜と云う人が恐ろしいのだろうか。もしかしたら彼女の上司なのかもしれない。

「ま、話をまとめると……」

大した意図も無く、私はブランコを漕ぎだす。ひざを曲げて振り子の頂点で伸ばして反動をつけ、鉄の擦れる音と共に鎖を揺らしていく。

「まず、世界のどっかに結界で覆われた幻想郷があつて。その幻想郷の中にある屋敷“紅魔館”で門番をしていたのが美鈴。昨夜から徹夜で門を護っていたけれど気がついたら門と一緒に私達の住む世界の“外”に居た。事の顛末はこれでいい？」

「でもやっぱり信じてはもらえないんでしょう。ええ、分かります人間はなかなかこの手の話を信じてはくれませんからね」

何を納得しているのやら。首をうな垂れる美鈴を横に、私は反動をつけてブランコから跳ね降り、彼女へと振り返る。

「そうね、私は信じるわよ。半信半疑なのはそうだけど、なにより面白そうじゃないの」

もちろんそれだけではない、彼女の話は嘘とも思えない現実味を持っていた。具体的にどうっていうものは無いけれど確かに私は彼女の言葉の裏に真実特有の“何か”を感じたのだ。

「ずいぶんと変わった人ですね。普通の人間ならもう少し訝しんだりするものじゃないですか？」

「だから、変わった人なのよ。よく云われるわ。まあ、第一発見者

が私だったのは運が良かったと思って諦めなさい」

笑顔で言い切つてやると。大仰過ぎたか、美鈴は心地よさそうにくすくすと笑ってくれた。

「とりあえず帰らなきゃいけないんでしょう。方法とかアテとか無いの？ 原因がわかったりするならその逆をするとか」

「そう……ですね。原因は大体わかってるんですよ。こんな事をしでかすのは一人しか居ませんし……ですけど原因はアテにはなりそうもないんで……」

「じゃあアテはないの？ 結界っていうものがどんな物かとかよく分かんないけど、場所とか、出入りする方法とかそういうのがあればいいと思うんだけど」

その発言に何を思ったのか、手をアゴに当てて数秒首を傾けた美鈴は跳ねるようにブランコから立ち上がった。

「博麗神社っ！」

「はくれい？」

「そうですねここが外の世界なら“一応”結界を管理しているあの紅白に会えれば何とかなるかもしれません！ 知りませんか？ 博麗神社」

博麗とは一体何か、またしても耳にした事のない名称だったけれども“神社”という知っている単語に僅かな光明が見えた気がした。「んー神社なら近くにあるけど博麗なんて名前じゃないわよ」

「むう、よもや人々にここまで忘れ去られていようとは……。まあ、寂れていきますからね。そのうち他所の神様がおせっかいしに来かねないくらいですよ」

「寂れてるって……そんな神社が管理してる幻想郷って大丈夫なの？」

「大丈夫なんだと思いますよ、現にどうにかなっていますし。とりあえず、ここの近くの神社に案内していただだけませんか。同じ神社の人間なら博麗神社についてなにか知ってるかもしれません」

「案内するのはいいけど、門はあのままでもいいの？ 門番なんだし

よう」

「それも大丈夫なんじゃないですか？ 人間がそう簡単に壊せる代物じゃないですし。それに、本来“門番”は門を守るのではなく門の中の人々を護るためですから。護るべき人のところに帰る方が先決ですよ」

「護るべき人……ね。殊勝なこと云うんだ」

「まあ、咲夜さんに怒られるのが怖い。って云うのもありますけれど、なによりお嬢様が信頼して私を門番にしてくださいださっているんですから、それに応えないと」

よほど良いお嬢様の下で働いてるのだろうか。主人を語る美鈴の真摯な瞳は一方的な信頼だけでは得られないものがある。

「お嬢様は幸せ者ね。こんな勤勉な門番を持つて」

「え？ 勤勉だなんて。いやーそんなことはないですよ。当然のことですよ」

あははと笑いながら頭を搔いて照れ笑いをするが謙遜よりも嬉しさが勝っているらしい、照れながらも笑顔は自重していない。

一言多く言うのなら。彼女は誠実そうだがこういうところで損をしているのだろうな、と。

「とりあえず、私の家に行こつか。制服でうろつくと面倒だから服を着替えたいし、神社までちょっと遠いから自転車も持っていききたいの」

「はあ、その神社って身支度が必要なほど遠いんですか？」

ブランコの横に置いていた鞆を取って出口のほうへ歩いていく。そしてそれに倣うように美鈴も横についてくる。

「云うほどじゃないけど便利なほうが良いのよ。そういえば、私が訊いてばかりだったし。行きがてら外の世界になにか質問があれば答えるわよ」

「あ、実のところはじめて見る物が多すぎて何から訊いていいのやら……。何から訊いたらいいでしょうかね」

「それを私に訊かないでよ」

「はじめて見る物は詠さんの方が得意でしょうから。私の知らないさ
そうなのとか知ってたりしません？」

「あのね、私が美鈴の事を知らないんだから。当然知らないわよ」

「先ほどから訊いてらしたのは詠さんのほうですよ」

「……“ミイラがミイラ取り”になってるわよ。とんちがしたいの
か謎掛けをしたいのか。ああ、落とし噺がいいの？」

「冗談ですよ。しかし、それって逆じゃありません？」

「分かんない張本人が何が分かんないか探してんでしょ」

「案外あるもんですよ。自分で何がワカラナイか分からないって」

「そういう時はね私に訊かないで“自分の胸に訊いてみる”って云
うのよ。ちなみに美鈴は多くて困ってるだけでしょ」

「それも、そうでした」

二話

「妖怪？　じゃあ美鈴はどんな妖怪なのよ」

「へ？　えーっと中国人風の妖怪と云いますか、なんと云えばいいのやら……とりあえず人よりは強くて長生きの妖怪なんですよ」

「そんな延長線みたいなこと云われても、とてもじゃないけどそうは見えないわ。ああ、ほらそこが私の家」

私は足を止めて道路に面した家を指す。私には見慣れすぎている年季の入った一軒家。祖父の代に建て替えられた家だが既にボロくなくていて一軒家といえども自慢のできるような家ではなかった。

“準備してくるから”と美鈴に言っただけの中へ入る。案の定“学校はどうしたのよ”と問いかけてきた母に“ちよつと人助け”とだけ返して自分の部屋へと戻った。鞆を放り、適当に制服を脱ぎ捨ててそれなりの可もなく不可もなくの服を身に着ける。めんどくさい半分、あんまり洒落た服を着ても美鈴の横じゃ焼け石に水というのが半分の判断である。

準備を整えたら自転車の鍵を手に裏口から外に出る。そして、いつもそこに置かれている自転車の鍵を外して美鈴のもとまで押していった。

「さ、準備できたよ」

「何ですかこれ？」

美鈴は物珍しそうに私の自転車を眺める。その様子に小首を傾げたいのは此方のほうだ。

「自転車よ、幻想郷には無かったの？」

私としてはどうにも美鈴が知っているものと知らないものの境界がよくわからない。彼女と話すとき近代的なものには疎そうに思えるが先ほど会話をしているロケットという単語が出てきて目を剥いたのは私の方だ。

「うーん、珍妙な店がありますからね。無いとは言い切りませんけ

ど、私は見たことないです」

「ロケットは知ってて自転車知らないなんてね。乗り物よ乗り物。よいしょ、こうやって乗るの。で、このペダルを漕ぐと歯車が回って車輪が回るの」

私は自転車にまたがり、ペダルに片足を乗せて丁寧に説明をしてあげる。

「両足分ありますけど、もしかして“ペだる”には両足乗せるんですか？」

「そうよ」

当然のことに即答すると美鈴は手で私を仰ぎながら小笑いする。

「またまた、ご冗談を。そんな二つしか車輪がないのに足を離れたら扱けるに決まってるじゃないですか」

美鈴の言うことはもっともだ、小さい頃私も疑問に思ったことがある。

「ところが違うのよ」

地を蹴り、ペダルを踏み込み、私は自転車を漕ぎ出す。身体でバランスを取り当然のようにその場を適当に走ってみせる。すると美鈴は僅かに目を見開いて驚き、感心する。

何故、自転車が扱けないのか、小さい頃に理由を調べたことがある。なんでもジャイロ効果というもののお陰で倒れないそうだ。

ジャイロ効果がどんなものなのかその頃の私では理解できなかったが、幼心を満足させることはできたので今の私もそれ以上のことを知ろうとは思わない。

とにかく回転していれば安定する。そういうもんなのだ。

「簞が空を飛ぶのはよく見かけるんですがその“じてんしゃ”も同じような“理由”で扱けないんですか？」

「同じじゃないわよ……自転車は空を飛ぶのは映画の中だけ。これはキチンとした“理屈”で動いてるの」

美鈴の前まで戻り緩やかなブレーキで止まる。釈然としない顔の美鈴にサドルを跨ぎながら私は言ってる。

「そういうもんなのよ」

ふと、私は美鈴を下から上まで見やり気になる点をひとつ見つける。

「ちよつと行く前に――」

「？」

「ほら帽子。せつかく服をコートで隠しても帽子がそれじゃおかしいわよ」

美鈴の頭から帽子を拝借してそれを手持ちのバックに収める。するとどうだ、コートに紅髪ロングの長身美人の出来上がりだ。

彼女の外見から、そう少なくとも私の主観から違和感というものが消えてしまい。そこにいる彼女が現代に住む只の美人にしかみえなくなる。

違和感とセットだから許せたその美人ぶりが身近なものになったせいか、杓子定規が私と同じ基準になつてしまいいんだか納得いかなくなり少し唸った。

「むう」

「詠さん？ 私何か変ですか」

分らないのであるう美鈴は首をひねる。まったく、自覚が無いのがなおさら妬ましい。

「いや、羨ましいだけ。さ、乗って」

「乗るって……後ろにですか!？」

「そうよ、変な方向に体重のせると扱けちゃうから、ちゃんとバランスとってね」

「は……はい」

不安からか僅かに躊躇いながらも美鈴は荷台に大きく跨って乗ってくれる。

「こんな感じですかね」

「美鈴……脚」

「あし？」

コートから覗く扇情的な生脚。みると太股の付け根まで見えてし

まいそうなくらいにチャイナ服のスリットが開ききっていた。

「跨がないで脚閉じて。そう、横向きに座って私の腰に手を添えときなさい」

「バ、バランスが取りづらくないですか？」

「ラフな女っていうのも悪くないけどね、女性としての身嗜みってモノも大事なの」

「嗜んだものは拳法くらいしかありませんよ」

「じゃあ、今だけ嗜んでちょうだい。美脚を売り歩く趣味はないからね」

「ん、わかりました」

家から自転車漕ぎ出し高校とは逆の方向に向かう、それは神社が町の中心からは少し外れた海側にあるからだ。

私の街は海に面した港町で魚くらいしか見所の無いつまらない街。中心部ではそうでもないが海沿いに行けば潮風が強く、港と船以外は何もないと云ってもいい。

冬の海風が道を切り、吐き出す白い息と溶け合いながら私たちの髪を風いでゆく。

歩道など無い、無造作に立っていた電柱を避けると自転車はなぞっていた白線を越える。車道の外へ戻るため自転車は私のハンドルに二人分の慣性をつけて応えた。

そのうちに道路が変わりガードレールの内側に作られた歩道の中

に滑り込む。

「……」

ふと横に目をやると海があった、昔は嗅ぎ慣れて気付きもしなかった海の匂いが今でははっきりと分かる。この歩道を通るのがあまり懐かしくて私は後ろに視線を流した。

「ねえ美鈴」

「……え、何ですか？」

自転車に乗るのは初めてらしいがやたらにバランス感覚のいい二人乗りをする彼女。まったく、この人は……この妖怪はよく分からない。

「小学校の頃かな。私ね、小学校がこっちの方向にあって下校するときにここから眺める夕日が好きだったの」

「しょう学校、ですか？」

「小さい子供の行く寺子屋みたいなものよ」

「そこに通っていたんですか？」

「うん。……私ね、あの頃が大好きだった。毎日が惜しくなくて、それを憂うことも無かった。冬の寒さもあの頃の私はなんとも思わなかったの」

「良い思い出があるんですね」

そういつて笑う彼女の笑顔こそが小学生の子供のようで素直に羨ましい。

「ただ……もうあの頃には戻れないのが悔しいの」

横目で覗くと美鈴は少し目を細めて私に微笑をくれた。それが嬉しくて私は苦笑いを浮かべた。

「詠さん……寒いですか？」

「少し寒いかな」

短く答えて私はペダルにかける力をさらに込めていった。

星と冬と金の年と呼ばれる皇月の頃。

後に“春雪異変”と呼ばれる事件よりしばらく。春が戻ったと思われる幻想郷にはまた冬が戻ってきた。事件で壊れた結界の修復に“八雲 紫”が動いて以後どこからか冬が迷い込んでいるのだろうか。

博麗神社と共に博麗大結界を管理する“博麗霊夢”はそんなことを考え、縁側に座り羊羹を脇にお茶を啜って身体を温めていた。そこに一陣の風と共に空から影が降ってくる。

霊夢が目をやると風の主は金髪を揺らして慣れた手つきで箒から降り、白黒の服にズレた白黒帽子を直しながら霊夢の前までやってくる。いつものことなので霊夢は気にもせず無頓着に迎える。

「また、休憩してんのか？ もう少し気合入れないとゴミ神社になっちゃうぜ」

魔法の森に住む魔法使い。“霧雨魔理沙”は霊夢の横に立てかけられた竹箒を見てそう云った。

「躍起になっても明日にはまたやるんだから。これくらいがいいの……それは？」

対する霊夢は魔理沙の脇に抱えられた数冊の本を見てそう云う。

「ああ、図書館からたった今借りてきた」

「強奪してきた、ね」

「拝借だぜ」

「一生？」

「気が向いたら返しに行くさ」

毎度のこと、口では借りていくというのが魔理沙のやり方だ。そう思いながら霊夢は茶を啜り羊羹に伸びた魔理沙の魔の手から羊羹を避難させる。

「ああ、そういえば紅魔館の門番が消えてたんでずいぶんと楽に入

れたんだよな」

「門番が？　ようやく解雇したのかしら」

こういうことが重なると、動かないわけにもいかないのだろうか。魔理沙の吐き出す白い息を見つめながら、霊夢は仕舞ったばかりの被い棒のことを思い出す。

「さあな。なににせよ、明日も楽に本を借りにいけるぜ」

本を縁側に置き、今度は勝手に茶を淹れたす魔理沙。まあそれくらいはいいかと霊夢は黙認する。

「その本は、読まない気なの？」

「今日中に読み終える。明日は私の茶菓子も用意しておいてくれ」

「……うちも門番を雇おうかしら」

「鳥居でも守るのか？　それじゃあ鳥居番だぜ」

「うちの神様の邪魔じゃない。居たのなら庭掃除を頼むのよ」

「そりゃあいい」

「よっ……と」

私は自転車のスタンドを立て、鍵を掛ける。そこは海沿いの道路から脇道に入り冬の海風はもう届かない、木々が木枯れた山の上にある神社。

荷台から降りた美鈴が私の横に立つ。

「ここがその？」

「神社よ」

首を上へ向けると運動部の鍛錬にはもってこいであろう、見上げるほどの長い石段が今私達の目の前に立ちふさがっていた。ちなみ

にこの周辺に学校施設はないので運動部がこの石段を利用するといふことはない。

「ここらでは有名な石段なのだが、ただ有名なだけ。長い長い石段は信仰深い老人方の足さえ阻み、神社は地元の日常とは離れた存在になってしまっている。」

「そういえば美鈴って神社とか入って大丈夫なの？」

「何がですか」

「妖怪でしょ？ 何かこう神域に入ると不味いとかないの？」

「私はあまり神様は信じていないのだが、彼女が妖怪というのならそういう話もあるのかも知れない。神社に入った途端苦しみだしたりされたらたまらない。」

「いえ、全然」

「真面目に心配した私が馬鹿に思えるくらいにあっけらかんとした返事が返ってくる。」

「まあ、大丈夫ならいいんだけど……」

「らしく」 ないと思う。私の勝手な妄想なのだが妖怪というのならもう少し禍々しい……とは云わない、それらしいところがあっても良さそうなのだが。今のところ彼女はコスプレ好きの変人と云われても納得できてしまいそうだから困る。

私は美鈴と共に神社を見上げる。といっても上にありすぎて神社の位置が見えない角度になってしまっているのは喧嘩を売っているとは思えない。

「久しぶりに来たけど。見てるだけでやる気を奪われていくわね」

「そうですか？ これくらいなら楽勝ですよ」

予想とは裏腹に美鈴から小気味のいい返事が返ってくる。見ると屈伸運動をしながら彼女自身はやる気まんまらしい。

「結構掛かるのよこれ、運動部の知り合いだつて一気にはいけなかったんだから」

「ご心配なく。チャチャツといきましょう」

「へ？」

ふわりと私の身体が浮き上がる。何事かと思う間に私は美鈴の小脇に抱えられていた。

「いきますよっ！」

何が起きたのか私がよく分からないまま、美鈴は何かをするつもりらしい。

美鈴の身体が僅かに沈みこみ、彼女の筋肉が強張るのが分かる。

「ちよっと待つて……何？ なにするのっ——」

次の瞬間、私達は重力を置き去りにしていた。

跳躍。

いや、それは限りなく飛翔に近い。

“登る”ではなく“昇る”と形容すべきだ。人間大砲で打ち出されるという気分を味わえるのだろうかそれとも逆バンジーという奴だろうか、両方とも私は体験したことは無い。もはや私では現状の比喩の仕方も無かった。

風を裂く音だけが耳を抜け、何十段という石段が視界を駆け巡る。一度で何段飛び越えただろうか。上昇が頂点に達し、追いついた重力に捉えられ下降を始めるところで美鈴の右脚が新たに石段を捉える。

勢いが殺されるギリギリのところ再度跳躍。彼女の蹴った石段の端が僅かに欠けたことに驚きながら私は重力のありがたさを痛感した。

一部始終を体験しても分からないことがよくもあるものだ。流石にこの年齢になってそんなことがあるとは思ってもみなかった。

気が付くと私たちの目の前には神社の境内が広がっていた。時間にして十秒も無かったと思う、歩数は五歩くらいだろうか。確信は無い、なにせ一分も経っていない事柄なのに私の記憶があやふやなのだから仕方ない。

放心したままの私に気が付いた美鈴が声を掛けてくる。

「詠さん。大丈夫ですか？」

「う、うん……美鈴って本当に妖怪なのね」

「もちろん、人間にはちよつと真似できませんよ」

ちよつと、どこではない絶対に無理だ。そう思いながらまだ小脇に抱えられている自分に気付き、恥ずかしくなる。

「ごめん、ちよつと降ろして……つとと」

美鈴に降ろしてもらう。地面に着いた脚がいうことをきかずに私はそのままへたれこんでしまった。

「はぁー」

「腰が抜けちゃいましたか？」

「云わないで……」

情けないついでに仕方ないと言い訳をさせて欲しい。あんな目にあつたら誰だつてこうなるのは決まつてる。

「あんなに身軽に飛ぶなんて、まるで天狗じゃない」

「あれくらい、天狗でしたら更に速いですよ」

「……」

冗談だというのに……返す言葉も無い私のほうが馬鹿みたいだ。

「幻想郷は天狗も居るの？」

気を取り直して脚に力を入れ、どうにか立ち上がる。気恥ずかしさを振り払うように私は先にたつて境内に入っていく。

「もちろん居ますよ。といっても排他的なんで文屋の鴉天狗としかあまり話しませんけどね」

「天狗も色々居るんだ。確かお嬢様は吸血鬼だったんだっけ。幻想郷って和洋折衷までしてるのね……」

「確かに折衷してますけど。やっぱり紅魔館は幻想郷の中でもに少

し奇異ですよ」

境内の脇に小さな販売所があつたのを見かけて私たちは人が居ないかと其処へ寄る。

そこには販売員だろう私と同じ年くらいの女の子がそこに居た。型崩れのしてない巫女服、着慣れていないことは一目瞭然の若い巫女が私たちに一礼する。品物をみると交通安全に安産祈願、おみくじや絵馬などが売つてある。別に買い物をするわけじゃない、早速私は若い巫女に切り出す。

「あの、少したずねたいことがあつて来たんですが」
「はい」

「神社を探してて……ああ、ここの神社じゃないんです。博麗っていう神社なんですけど」

そんな格好で寒くないのかと視線を泳がすと部屋の隅にストーブが動いているのが見える。なるほど販売所の中と外で空気の壁が出来ているのはこのせいだ。意外と神社もちやつかりしている。

「神社ですか。ちょっと待ってください、神主さんに訊いてみます」
後ろの戸を開けて女性は奥へと入っていった。空いた扉から見ると奥でなにやら作業をしているのが見える。恐らく新年の準備だろう、おみくじ、お守りや破魔矢などの準備に手伝いで年頃の子が集まっているのだ、おそらく目の前のこの娘も手伝いなのだろう。

確かうちの女子高でも神社の手伝いの募集をしていた覚えがある。授業がある日に堂々と休める反面、授業の一環として扱われるためバイト代は出ないらしいが……。

しばらくすると、今度は神主様であろう人が奥からでてきた。流石に正装ではなく、くたびれた作務衣を着た普通のお爺さんだ。
「お嬢さん方、神社をお探したとか？」

美鈴がずいとお前に出てきて神主さんの前に立つ。彼女から話す様子だったので私はとりあえず静観する。

「博麗神社なんですが知りませんか。私はわけあってあそこの巫女に会わなくてはならないんです！」

「はくれい……うーん博麗という名は聞きませんな。私の覚えではこの近辺はここ以外に神社がなかったはずですし」

「じゃあせめて巫女だけでも知りませんか。ふわふわ空を飛んでいるんですけど見かけたとか……ないですかね？」

一瞬間を置いて神主さんが大きく瞬きをする。そして私は額に手を当てる。

「紅白で大きなリボン付けたコレくらいの巫女が空を飛ぶんですよ」

美鈴はひとつ頭小さい空を手で切って説明するが流石に無茶すぎる。大きなリボンを付けた巫女までは妥協しよう。だが空飛ぶ巫女とは何の冗談だろうか、冗談ではないことは分かるが冗談にしか聞こえない。巫女は神社でお仕事をするものだ、間違っても空を飛ぶ役職じゃない。

「空ですか……それはそれは」

思ったとおり、神主さんは苦笑いを浮かべて明らかに対応に困っている。

仕方ないので美鈴のコートを強く引く。

「な、なんです詠さん？」

戸惑う美鈴に私はこう耳打ちする。

「私が訊いてみるから、入り口で待ってて」

その言葉に美鈴は少し不満そうな顔をしたが断る理由も無いように“お願いします”とだけ私に云って石段のほうへと歩いていった。それを確認して私は神主さんに少しの言い訳をしてから十五分ほど会話を続けた。

「どうも、ありがとうございました」

神社の神主に礼をして私は境内を歩く。海風が遠く、今は緑の香りが強い。

鳥居の先の長い長い石段、そこにコートを着た美鈴が座り込んで

その眼下の街を眺めていた。

よいしょ。と仕草を加えて美鈴の横に私も座り込む。この小さな神社は山の上に立っており、この小さな街を一望できる唯一の場所でもある。

「どうでした？」

「全然駄目。近辺の地図を見せてもらったら、この付近にほかの神社は無し。電話帳も出してもらったけど博麗なんて名前も無し」

「そうですか、せめて手がかりだけでもあると思ったんですけど」

「何か、他にはもうアテはないの？」

「お手上げです。もうこうなったら地道に外の世界を探し回らないといけないんじゃないか」

「ひとつ良い事教えてあげる。日本の地図を作ろうとした人が居てね、その人は18年間死ぬまで掛かってても地図はできなかったらしいわよ」

悪戯気味に笑って云うと流石の美鈴も本当にうな垂れてしまった。どうにかしてあげたいのはそうだが私ができるのは茶化すことしかない、それが私には辛いのだ。

ならばせめて気晴らしだけでもさせてあげたい。どうせなにもできないのなら……。

「急がば回れ。果報は寝て待て……」

石段から立ち上がり私の世界を見つめる。来訪者である彼女にはこの世界がどう映るのだろうか。そんな好奇心もあった。

「少し、見ていかない？」

私は美鈴に振り返る。彼女に……私の“嫌い”なこの世界を見てもらおう。彼女の無垢さに鎌首をもたげた私の心がそう云った。
「私の街。私の世界」

三話

冬の海風がまた鼻につく。

「あれ？ あれれ？」

素っ頓狂な疑問の声の後、鉄がアスファルトに叩き付けられる音が防波堤に響いた。といっても波の音と車の音が其れをすぐに飲み込んでいつてしまう。

「痛たたあ……」

「ねえ美鈴、そろそろ諦めたら？」

私は呆れがちに云う。なにせ車道脇の歩道だ、見ず知らずのドライバーの目には奇妙に映るだろう。私の目の前ではコートを着た美鈴と愛用の自転車がくんずほぐれと一緒に倒れていた。神社の帰りに美鈴が自転車に乗って運転したいと言い出したのが発端なんだけども、ご覧のとおり車輪は地を転がらずカラカラと文字通り空転している。

「もうちよつとでコツがつかめそうなんですけどね。ペダルに気を散らすとバランスが取れなくなるんですよ」

「そればかりは“慣れ”よ。美鈴はバランス感覚はいいけど要点はそこじゃないの、自転車に乗るときに“バランスをとる”と“漕ぐ”を意識して両立してる人はいないわ。慣れれば無意識にできるようになってるんだから」

「慣れとは恐ろしい」

「なんか違う気がするけど……そんなことよりも、温泉に行くとは云ったけど行く前に風邪なんかひかないでよね」

「そこはご心配なく。門番は身体が資本ですから」

さて、昼も近くなってきた。

まずは近くにある温泉で身体を温めてから街の中心部にいけばいい。ついでに中心部にあるインターネットカフェで“博麗神社”を検索すれば手がかりくらいは見つかるだろう。

もし夕方までかかってしまったら一度家に帰ろう、気は進まないが両親に適当な説明をして私の部屋にでも泊まってもらって神社探しをすればいいだろう。端的に云えばケセラセラというやつだ。

「さて、もういいでしょ自転車」

「むうー。わかりました……」

残念そうな声で云いながらも美鈴は自転車を返してくれた。私が前に美鈴が後ろに。最初のスタイルで銭湯へと私達は漕ぎ出した。

そのまま数分ほど漕いだ所で目的の銭湯に到着する。此方は先ほどの神社と違い人がよく足を運ぶ、近所の人々にも親しまれる古くから街の馴染みになっている銭湯だ。

木と瓦で造られるその古めかしい外観とは裏腹にマッサージチェアはもちろん、ご親切にコインランドリーも設置してあるので、身体を温めるだけでなく。私の横できよきよと子供のように視線を泳がしている彼女、汚れが酷い美鈴の服も洗えて一石二鳥というわけだ。

「美鈴は銭湯とか初めて？ 広いお風呂なんだけど」

私が声を掛けると美鈴は観察をやめて私に顔を向きなおる。

「それでしたら。普段はお屋敷の浴場を使わせてもらってますよ」

「そっかお屋敷勤めの特権って奴ね……普通のお風呂に入る私としてはうらやましい限りだわ」

早速、暖簾をくぐって受付で二人分の料金を支払う、美鈴の分は私の奢りだ、普段はこんなことはしないが今回は特別である。

靴をスリッパに履きかえて私は迷うことなく脱衣所に入っていく。きよきよと物珍しそう且つおっかなびっくりに美鈴も後を付いて来る。

「んじゃあ服を脱いだら洗濯するから貸してね」

「あ、はい。分かりました」

荷物を籠に置き、衣服を脱ぎ去る。ついさつき着替えたばかりだ

けど、ついなので私の服も洗濯してしまおう。そうして隅に設置されているランドリーに自分の服を放り込む。

「ほら、美鈴の服もか……して」

服を受け取るために振り返り、伸ばした私の腕が固まる。

何故って？　そこに裸の美鈴が居たからだ。

全裸？　別に女性の裸体がまずいわけじゃあない。女の私にとってはなんてこともないものだ。

じゃあ何だって？

スタイルである。

カモシカのような脚、まるでモデルじゃあないか。ウエストも完璧で彼女のすべてがスリットの空いたチャイナ服を着るために生まれてきたんじゃないかと思うくらいだ。

そしてなによりは胸にある脂肪の塊だ。でかい、とにかくデカくて妬ましい。所詮脂肪の塊なのだが私によこせと云いたい。

「詠さん？　服ですけど」

「……分かってるわよ」

彼女の差し出す緑のチャイナ服を膨れっ面で受け取り、これでもかとランドリーに叩き込んで硬貨を投入してやると重厚なモーター音と共に注水が開始された。

「詠さん。あの、出会った時からたまにそんな目をされて怖いですよ」

それは当然だ、私は目を側めているんだ。

私は悪くない。悪いのは美鈴だ。そう、理不尽な個人差のある成長。あるいは巨乳を崇拝する社会風潮こそが悪なのだ。

「べつつにー」

これでもかと口振り、目を側めてやると美鈴は冷や汗と身を引いて答えてくれた。

「ちよっと怖いですって……」

美鈴と一緒に浴場へと入る。入る前は老人など時間を持て余している先客が居ると思つたのだが、存外に平日の午前中から利用する人はおらず女湯は貸切状態だった。

広い浴場を二人きりで使える。そんな少し贅沢な気分で身体を洗つていた。美鈴はシャワーと蛇口の使い方など分からない様子だったが、横で扱う私の見真似でどうにか扱っていた。

そして、身体を洗い終えて何事もなく私たちはその肢体を湯に沈めている。昼間から銭湯に行くなどそうあることじゃない、窓から差し込む陽の光が奇妙に明るいがそれもまた清々しくて悪くなかった。

窓から視線を落とすと心地良さそうに目を細める美鈴がそこにいる。彼女を横目に、私は湯に沈んだ自分の身体を見つめる。今のいままで云わなかったが私は太ってなどいない。体重も気にするようでもないし腰に括れ位ある、先ほどから気にしてはいたが特に胸が無いというわけでもない、見栄ではないがもう少しで……そう、BランクからCランクに上がれそうな、そんなくらいにはある。そう、自分の身体にそこまでコンプレックスがあるわけじゃないそれなりに自信を持っているくらいだ……だが、だがしかし！横に鎮座するアレは何だ？ 美鈴の胸部にあるメロンの大きさでありながら軟らかそうな餅を連想させるその胸は。

理不尽だ。あんなものを許しては世のためにならない。人によっては疑問が多々あるだろうが、ならないと云つたらならないのだ。

ならばどうするか。そう、肅清せねばならないのだ！……せねばならないと云つたらならないのだ。

私はあくまで平静にターゲットである美鈴に声を掛ける。

「美鈴。ちょっと後ろ向いてみてくれない？」

「え？ はい。そうですか」

小首を傾げながらも素直に私の云うことを聞いてくれる。良い人だ、実にお人好しだ。だが、世の中お人好しだけでは渡っていけない。無情なものだ。

「いただきます」

「へ？」

両手を併せて一礼。わきわきと手を準備運動させて舌なめずりをひとつ。飛び込むようにして後ろからその双球を鷲掴みにしてやった。

「——っひあ！？」

いきなりの事に美鈴は一瞬身体を強張らせたが思ったよりは抵抗をしなかった。

「うわっ、なによこれ！？」

愕然とした。冗談半分で鷲掴みにしたがそんなことも忘れて私は本気で胸を揉みしだく。

胸の感触なんか自分のもので知ってはいるがコレはおかしい。絶対おかしい。

骨や筋肉のない、人間の最も軟い感触が手のひら一杯に乗っかっている。さらにほどよい重量感。揉み応えという言葉が理解できる代物だった。

「あの……詠さん？」

様子に気付いた美鈴が声をかけるが私は無視して揉みまくる。

「こういうのってさ、食べ物なの？ それともあれ、遺伝なわけ？ もう私のDNAには生まれる前から負け犬の文字が刻印されてるわけ？」

「ちょ……あの、くすぐったいですって」

身じろぎするも明確な抵抗が無いので無視して私は続ける。

「大きいのもそれなりに悩みとかあるんですよ。きつと小さいほうがいいことも沢山——って痛い痛い痛いです」

彼女なりの気遣いに魔が差して先端を抓ってやる。そんな理屈は分かっているさ、でも分かっているながら憎いのだ。

「デカくなり過ぎて取れる。胸ごとポロリしろ」

ひたすら揉みまくる。男共の恨めしい声への優越感でもなし、なぜか分らないが無我夢中で揉みまくった。

観念したのか美鈴は諦めがちに、もう好きにしてください——と云っていたが惨めで哀れな私も本音では泣きたかった……。

そんなこんなとじゃれ合って、どれくらい楽しんだらうか。

マッサージチェアの極楽浄土へ誘うその振動に本来の目的と意識を失いかけた頃に、服の乾燥を終えて私たちは銭湯を後にした。

街の中心部へと向かうと、海の匂いは遙か遠くへと去り。私たちは自動車の走る音とアスファルトが支配する場所へと向かってゆく。途中で線路沿いに自転車を走らせながら電車とすれ違くと、美鈴はその鉄の巨体の速さと大きさに声を上げて驚いていたので私も声を出して笑ってしまった。そうしてそのまま進むと駅に着く。小さなロータリーの中央に意味もよく分からない、小さなモニUMENTが鎮座している、それは小さな駅だ。

駅の駐輪場に自転車を置いて鍵をかけておく。自転車から降りてみると風が聴こえなくなり街の喧騒がよく聴こえてくるのが分かる。相変わらず美鈴がきよきよとしていた様に何故か安心しつつ私達はロータリーの外周をなぞりながら建物へと向かった。

「詠さん、次は何処にいくんですか？」

「インターネットカフェ。パソコンで調べれば流石に情報ひとつくらい出るでしょう。知ってる？ コンピュータ」

私は目の前、進む先に丁度あるこの街にたった一軒しかないインターネットカフェの看板を指差す。

「コンピュータ……知っていますよ、箱の形をした情報を集める式神ですよ」

「式神って。まあ、間違っでは無い……かな？」

式神の定義がよく分からないけど。道具は式神と呼んでいいのだろうか、私には只の道具なのだが美鈴にとっては複雑すぎて道具としてみる範疇を超えてしまっているのだろうか。そんな疑問が浮かんだが細かいことは置いておこう、別にコンピュータが式神と呼ばれて困ることも無いだろう。

「そういえば、外には色々な式神が居ますけどみんな無愛想ですね」
そう云って美鈴はすぐ其処にあった赤い自動販売機を指差す。

「その口ぶりだと幻想郷にも居るの？ 愛想があるやつが」

「ええ。幻想郷にもいますよ。猫だったり狐だったり」

「猫だったり……狐だったり？」

「まあ愛想はありますけど弾幕を振りまいてくれますから襲ってきたら困りますけどね」

「弾幕？」

私の想像力が貧困なのだろうか。“愛想のある猫や狐が弾幕を張っている様”を想像しようと努力をするがソレはあまりにシニールすぎる光景でどうにも納得がいかなかった。

インターネットカフェ。本来はインターネットサービスと軽食を提供することから名づけられたが昨今のサービスの充実振りは目を見張るものがある。難民すら抱えるといわれるそのサービスは偶然ながら新しい施設の形なのかもしれない。

だが間違っても私は仮宿として利用するわけでもなし、個室で如何わしいサイトを閲覧するわけでもない。カウンターで料金の安いサービスを選んで料金を先払いする、もしも延長をした場合は後払

いをしなければならぬ。

私達は見える位置にある席に歩を進める。

「コンピュータがこんなに沢山」

「いっぱいあるでしょ。一個くらい貰って行ってもいいのよ？」

「え？ 本当ですか」

「嘘よ。泥棒呼ばわりされちゃうから動かしちゃダメだからね」

美鈴の肩透かしをくらった様な顔に満足して席につく。コンピュータの電源を入れると黒い画面からしばらく、さまざまな画面が切り替わって草原を模したデスクトップ画面がモニターに現れる。

「さて、調べるわよ」

「あの、詠さん。こんな状態でどうやって情報を集めるんですか？ 安楽椅子探偵をするなら止めはしませんけども……」

だんだんと分かってきた事がある。どうやら美鈴は現代の利器となると名前と形くらいは知っていてもどうやって使うのかなど、詳しい事は知らない様子だ。ちなみに情報もなしに私がここで唸って博麗神社の場所が分かったのならそれは探偵じゃなくて超能力者と云うべきだ。

「これこれ」

私はパソコンの裏側から伸びるLANケーブルを一本摘んで美鈴に見せてやる。

「糸ですか？」

「回線。これが世界中のコンピュータと繋がる線になるの。これで情報のやり取りをするのよ」

「はあ、こんな糸ですか？」

「“通信” っていうんだけどね。ちょっと極端な例だけど……」

マウスを裏返してみると赤いレーザーが光っている。私はその光を指で遮ったり離したりする。モールス信号と云う奴だ。

「この光が光っている光っていないを組み合わせで暗号にしてひらがなを表現すれば、光の届く限り言葉が届くわ」

まあ、細かいことを云えばかなり違うのだがソレは今云うことじ

やない。私はマウスを置いて。改めてケーブルとパソコンを指す。

「それをもっと複雑にした道具がコレ」

「な、なるほど。えーっとつまり」

「この糸を通して、世界中の人に博麗神社のことを訊くのよ」

「な、なるほど」

現代の文明規模に対して美鈴の中での想像が追いついていないのだろう、口ではうんうん云っているが頭から煙がでそうなくらいに混乱しているのがよく分かる。

「まあ見てなさいって」

早速モニターに向き直る。美鈴は私の肩に手を置いてモニターを珍妙そうに覗き込んでくる。

とりあえずインターネットブラウザを起動させると一般的な検索サイトが目の前に現れる、キーボードのホームポジションに手を沿えて準備完了。

「ねえ美鈴“はくれい神社”の字はなんて書くの？」

「えっとですね。“博学で美麗な神社”です」

「そういうと素晴らしい神社に聞こえるわね」

私は慣れない手つきでキーを叩く、正直なところパソコンは苦手なのだ。

どうにも、携帯電話といいキーボードといい、描かずに書く類は好きになれない。変換で知らない語句が出てくると妙な不安に駆られるのだ。こういうのを無知蒙昧に振り回しそうで怖いったらない。特に物書きはそうなのだろう……といってもそんな見栄で踏み外してこそ成長するのだと思えば、間口が広くなっているのだとも云える。結局は“学びて思わざれば則ち罔し”なのだが……。

『博麗神社』

この名にどんな意味と意思が込められているのだろうか。横好きのような想いを馳せながらエンターキーを叩くと、あっという間に

情報が検索され、かき集められた。

そして、その検索結果に私は目を剥くことになった。

「何、これ……」

インターネットを頻繁に利用する人はご存知かもしれないが検索サイトを利用して検索をすると大概検索した単語の結果件数が表示される。その検索結果が数十万件という値になっていたのだ。

数えるほどの件数と地図でも出てくれるのかと思っていたが……
存外、博麗とは高名な神社なのだろうか。

「博麗神社例大祭？ 例大祭ってお祭りのことばかりじゃない……
……って!？」

マウスクリックを進めると私の中で混乱が渦巻き始める。予想は大外れだし美鈴の言葉とはまるで違うモノばかり出てきたのだ。とりあえず理解できる単語を拾ってどうにか読解してゆく。

サイトを閲覧しているとまるで見当外れの内容に勘違いなのかと思ったりしたがその最中に現れる特徴的な少女の画像たちに美鈴が反応するので無関係ではないらしいが……。

美鈴は博麗神社を“結界を管理する巫女が住む神社”と云っていた、だが私の世界で、博麗神社で行われるであろう例大祭とは“同人即売会”といういわゆるサブカルチャー行事の名前らしい。

「秋葉原にでも出て行かなきゃいけないのかな……」

そちらの方面には疎い私には短絡的なイメージしか湧かないが。それでも、同人誌を買いに行けば美鈴が元の世界に帰れるなどとは思えないし思いたくも無い。

その時。ふと、私の中で疑問が浮かぶ。

“博麗神社”という単語が世に出回っているのであれば“紅 美鈴”という名も検索すれば何かしら出てくるのではないかと。

早速、検索サイトに戻ってキーボードに手を伸ばしてみる。

「ねえ。もしかしたら、美鈴のこと知ってる人がこの世界にもいるかもしれないわよ」

「え？ 私をですか。……いやぁそれは無いと思いますよ、私は所

詮、一介の門番ですからねえ」

口は云うが美鈴の笑顔は自重してない。かなり期待していると見て間違い無さそうだ。

「くれないの……みず。と」

ほんめいりんでは変換が出ないので読みだけで紅　美鈴と打ち込みエンターを叩いてみた。

「あれ？」

検索結果0件。無情な結果に追い討ちをかけるように、こう記されていた。

『もしかして“中国”ではありませんか？』

何も云わず振り返ると美鈴がしくしくと泣いていた。

私の出来る最終手段でもあった期待のインターネットカフェだったが、あまり収穫はなく博麗神社の明確な場所については結局分らなかった。最悪の場合、例大祭というものが行われる場所に連絡を取ることもできるが、それが的外れな行為だということが分かっただけでも収穫というべきか。

さて、所変わって今度はゲームセンターである。私は適当な椅子に座ってゲームのデモを横目に見ており、目の前では美鈴はシューティングゲームに夢中になっている。私はゲームは苦手なのだがダーツなどの当てが大の得意なので美鈴に自慢してやろうとこのゲームセンターに誘ったのだ。

ゲームセンターに入るなり私は意気揚々と美鈴にダーツ勝負を仕

掛けたら以外にも……いや、予想通りと云うべきか、美鈴もダーツが巧くて結果は引き分け。今までダーツでは負けなだった私が悔しがっている間に美鈴はシューティングゲームに興味を持ったらしく、コイン一個だけ渡して数十分というわけだ。

私が立つのに疲れて空いている椅子に座って待っていると美鈴の後ろにはいつの間にもやら数人のギャラリーが出来てしまっていた。私が最後に見たときには“死ぬがよい”などとゲーム内のおっさんに云われていたが美鈴のシューティングの腕はそんなにすごいのだろうか。

しばらくすると美鈴はクリアしたのか負けたのか、とりあえず終わったらしく私をみつめて戻ってきた。

「いやー楽しかったです。外の世界の遊戯は凄いですね」

「いやー幻想郷の妖怪も凄いですよ、ええ」

私は気だるげに答える。いくら私でももう彼女のハイスペックぶりにもう呆れていた。

「次はなにしましょうか」

「そろそろ日が暮れてくるから、あと一個だけね。一個だけ」

「でしたら、慎重に選ばねばなりませんね」

そう云って美鈴は顎に手をあて悩みながらゲーム台を物色してゆく。そのうちの一台に目をつけたのか早速私に振り返る。

「詠さん。コレはどんなものなんですか？」

美鈴の指は、殴られ使い古されたパンチングマシンを指していた。

「パンチすればそれが何キロの力が表示されるゲームよ」

「力試しですか。おもしろそうですね、よしっ！」

何を思ったか美鈴はチャイナ服の懷から何かを出そうとする。

「“華符「破山砲」”で……！」

「……へ？」

嫌な予感がした。美鈴はただパンチをする様子だが私の第六感が“やばい”と告げていた。もしかマシーンごとぶち壊してしまうの

ではないか、と。まさかそんなわけないさと私の理性は云うが神社での“飛翔”を

見た後だと否定ができない……。

「待ったっー！」

「な、なんですか詠さん。私はいまから己の力を試そうと……」

「それよりも。ほら、こっちにしようこっち」

興味を逸らすために私はUFOキャッチャーを指差す。いまどきの台にしては珍しく、埋もれるほどに景品が詰め込まれている。

「これは？」

「UFOキャッチャーって云ってね。ボタンでそのアームを操作して景品を吊り上げたらいいの。ほら景品取っちゃえば紅魔館へのお土産にもなるじゃない」

「このぬいぐるみがもらえるんですか？」

「吊り上げてあそこの景品口に入ったらもらえるわよ。ほらそのクマのぬいぐるみとかお嬢様にいいんじゃない？」

「あ、可愛らしいですね」

かわいらしいクマのぬいぐるみを見つめて、ふと私の脳裏に疑問がよぎる。

「ねえ……吸血鬼はクマとか愛でちゃうの？」

「熊ですか？ 怖くはないと思いますよ。お嬢様は熊なんかより全然お強いですから」

「ああ、そう……」

そういう意味じゃないんだけどなあ、と苦笑しながら私はコイン投入する。

「さ、どうぞ。1のボタンが右で2のボタンで奥にいくからね」

「よおーし」

美鈴はボタンを上手く操作して器用にクマのぬいぐるみの上までクレーンをもってゆく。クレーンが停止しゆっくりと口を開けてクマのぬいぐるみへと降りてゆく。

「あれ……？」

しかし、クレーンは狙った熊のぬいぐるみから外れてその脇に生えていた別のぬいぐるみの紐にアームが引っ掛かってしまった。野菜を地面から引き抜くかのように何かかぬいぐるみの山から引き出されてそのまま景品口へと運ばれ、足元の取り出し口へと落ちた。

「……」

まあ、とりあえずだ。狙ったものとは違ったとはいえ景品が取れただけでも儲けものだ。私は取り出し口からそのぬいぐるみを取り出してみよう。

「何これ？」

妙なぬいぐるみだ。野球のボールくらいのマスコットが二つ。グニグニと握ってみるとスポンジよりは少し硬い、弾力のある柔らかさが返ってくる。

どうやら人の顔……首だけのマスコットなのだが小生意気な目つきが微妙に可愛くない……。

片方は赤と白色の髪飾りとリボンを付けており、一方は白と黒の帽子を被っている。

「スイッチ？」

後頭部にボタンがあつたのでなんとなく押してみる。

『ゆっくりしていつてね』

抑揚のない合成音声で語られたその意味不明の単語。

「……趣味悪いなあコレ」

「うーん、その顔はどこかで見たような気が……」

後ろを振り返るとなんともいえない顔で美鈴が首を捻っている。

「じゃあ、はい。美鈴」

「え？ 私ですか」

「ほら、幻想郷にもお土産持って帰らなきゃ」

「ああ……そ、そうでしたね。でしたら……この紅白をお嬢様に、白黒をパチユリー様にお渡ししましょう」

「そうね、きつとソレがいいんじゃない？」

やはり納得のいかない面持ちで私達は首を捻った。やはりこんなだけじゃあ紅魔館の人たちに失礼だろう、そう思い仕方なく財布から何枚か硬貨を取り出してクレーンキャッチャーの台の脇に積む。

「じゃあ、これだけ渡しとくから、好きなの取っちゃって」

「あ、ありがとうございます」

「いいっていいって。その生首がお土産じゃ外の世界の恥さらしになっちゃうしね。私はちよつと飲み物買ってくるから、美鈴はお茶でいいでしょ？」

「はい。でもいいんですか詠さん。こんなに奢って貰って、私お返しするアテが……」

「いいのいいの。私、小遣いあっても口クに使わないから、こういうときに使わないと溜め込んでてもしょうがないでしょ」

そう云って私はゲームセンターの自動ドアの方へと歩いていった。店内に自動販売機くらい置いてくれてもいいのにといいながら仕方なく店外へ出ると暖房の効いた店内から一転、刺すように寒い風、走り去る車のエンジン音、道行く人の雑談。拍子抜けするくらいにいつもの街がそこにあった。

いつもどおりだ、夢から覚まされたように、私の頭の中がが悲しいくらいに冷え切ってゆく。

私の日々過ごす現実が改めて身に染みる、美鈴が隣に居ないだけで、美鈴と一緒にならこんな寒さも、こんな喧騒も、気にならなかったのに。

でもそうだろう。私独りならネットカフェにもゲーセンにも普段は行ったりしない。普段の私は……私の日常は何も無かったじゃないか。意味もない、何も為らないこんな街が嫌になって……。

そう、ただ少しの間、幻想に酔い痴れてたんだと、冷静な頭が私を擁護した。

「……」

少しだけ冷え落ち込んだ頭で近くの自動販売機を思索する。すると、道の先から歩いてくる見慣れた制服に身を包んだ旧友の姿があった。いつもなら部活動をしていてこんな時間には帰らないような子だったので気になってつい声を掛けてみる。

「おい」

「……え？」

私の声に気付いた旧友は私の姿に眼をしばたかせる。

「ねえ、何で下校してるの？ 部活どうしたのよ」

「あれ、今日学校来てなかったよね。今朝事件があつたの知らないの？ なんでも犯人がまだ捕まってないからって暗くなる前に部活中止で下校になったんだけど」

「事件って？ 全然知らないんだけど」

といつても、朝からフラフラとしていたんだから私が何も知らないのは当然だ。けれどそれが今日あつた事件なら美鈴となにか関係があるかもしれない。そう思っていると旧友の視線が私の服装に向いていた。

「ねえ、その服どうしたの？ まさか今日一日、私服で遊んでたの？」

「え？ まあそんなところかな……」

視線を泳がせてしまう。そっか、私はいつもこんなことばかりしていたんだな、と悲しいくらいに思い出す。そんな私の様子をどう思ったのか旧友は急に心配そうな顔になった。

「ねえ、何でいつも独りで居ようとするの。お姉さんのことまだ引きずってるの？」

その言葉に私の冷えた頭が完全に凍りつくのが分かった。まったく下らなくて馬鹿馬鹿しい。

「うん……引きずってはいないの。ただ、きつかけだつたんだと思う」

「時々怖いわよ。貴女って何処かに消えていっちゃいそうに思えち

やうから」

消えちゃいそう……か。その言葉が馬鹿笑いがでそうなまでに悲しい。

「そう？　もしも消えちゃったら新しいタネに使えるかもしれないわね」

私が冗談めかして言うのと旧友も安心した様子で笑ってくれた。

「口だけは達者なんだから。凶悪犯って話だから早く帰らないと襲われちゃうわよ」

「ありがとう。用事が済んだらすぐに帰るから」

それだけ云って私は手を振り旧友を見送った。

自動販売機に硬貨を投入していくと金額が到達したところでランプが点灯する。まるで私を買ってくれと自己主張をしているみたいだった。その中でペットボトルに入ったお茶が私の目に留まる。アクリル板の向こう側で私と眼が合った。

少しだけ、まるで私が私を買うような錯覚があった。

「消えそうなら。消えてしまえばいいのにね……」

誰に向けた言葉でもなく呟いて、私は叩くようにしてそのボタンを押してやった。

日が傾く頃。“博麗霊夢”はその夕日を背に空を飛んでいた、その手に抜いた棒を持って。

氷精の住む湖を越えてたどり着いた先は紅魔館の門前、彼女が目をつけた異変は自身の思ったより手前で起こっていた出来事だった。「吸血鬼が寒さ好きなんて聞いたこと無いからまさかと思っていたけど、魔理沙の云ったたとおりね」

重力に身を引かせて地上に降り立つ霊夢。彼女の眼前には以前見たときとはまったく別物の門、そしてその門と外壁をつなぐ異常なまでに美しい切り口からは隙間風が漏れるが如く冬の寒さが溢れていた。

「さて……隙間風か」

とりあえず結界で封じるべきだろうか、隙間風は塞ぐに限る。霊夢がどうしてやろうかと思慮をめぐらせた瞬間、いつの間にやら目の前に音もなく現れた日傘を差した妖怪の姿に霊夢は口をへの字に曲げた。

「紫。何してるの？ まさかアンタまで本を盗みに来たわけじゃないでしょうね」

「門に本は置いていなわね。霊夢、貴女こそこんな日暮れ時に吸血鬼に用事かしら」

胡散くさい。何を企てているのか、そもそも企てているかどうかすら妖しい。境界の妖怪“八雲紫”に対する霊夢の感想はいつもどおりだった。

「用事はアンタよ。結界を直してとはお願いしたけど、その門とこの寒さはどこから持ってきたのよ」

「向こうは師走よ、少し漏れただけ。それにしてもずいぶんと仕事熱心ね、もう少し遅ければ良かったのに」

紫は空を仰ぐ。霊夢も視線を追うとその先には傾き始めた日が在った。

「日が暮れたらもう遅い時間なもの」

「日が暮れないと遅くはならないのよ。遅くなるまで待ってあげな

さい」

「アンタを？」

「門番を」

この妖怪が何をしているのかは良く分からない。だが、紫はこの場で弾幕ごっこを始める気は無いのだと理解して霊夢は小さくため息を吐き出す。

そんな二人を射す幻想郷の日は夕日へとその身を転じるため紅く染まりつつあった。

四話

私はこの街に十六年過ごしたが街中で喧嘩をするようなことは見たことが無い。柄の悪い人の罵り合いは何度か見たが殴りあうなどの大事にはなっていないかった。私が偶然みていなかったのだろうか、街は平和なのだと決め付けていたのだ。

さて、私は何を指してこんな語らいをしているのか。

「な、いきなり何をするんですか。止めて下さい!」

美鈴の声がゲームセンターの店内に響く。

ペットボトルのお茶を二本を持って何事もなくゲームセンターに戻った私の眼前で今まさに美鈴が二人組みの男に組み伏されていたからだ。

ひとりが後ろから美鈴の腕を捕らえて拘束、もうひとりが眼前に立ち言い放つ。

「おとなしくしなさい」

「こんなことをしておいておとなしく? そんな言葉は案山子にでも聴かせてやればいいんですよっ!」

美鈴の脚が真っ直ぐ上に振り上げられる。鈍い音と共に高々と上げた足が男の顔面にめり込んでいた。

「……ぐあっ」

後ろの男が必死に拘束と牽引しようとしているのをものともせず、美鈴は脚を引き戻してもう一撃。今度は腹にめがけて腰の入ったミドルキックを見舞う。

「ぶっ——」

男の身体が水切りの石のように後ろへ、低く跳ねてその身体に半回転捻りを加えながら私のほうへと顔面スライディング。

ありえない。美鈴の筋肉質とはいえ細く美しい女性の脚で身長が180センチはあろう大きな男が吹っ飛んだのだ、冗談以外の何物でもない。

だが、私にとって美鈴が“どんな奴をぶっ飛ばしたか”なんて事はどうでもいい。そんなことより“誰をぶっ飛ばしたか”が大事だった。

地面で寝ている男、その全身を濃紺に染めた制服、腰には無線に警棒。知らないわけが無い。

社会の安全や治安を維持する行政機関その名も——警察。
泣く子も黙る国家権力と云うやつだ。

「て……抵抗は止めなさい！」

相棒が吹っ飛ばされたことに取り乱した警察官は及び腰な声でありながらも美鈴の腕をさらに捻り上げようとする。

だが、捕縛術により力が入らないはずの格好から美鈴は強引に警官の腕を一瞬で振り払う。そうして平然と警察官に向き直る、その手に懷から取り出したカードを一枚示しながら。

「そういう言葉は、慈愛を持って云うべき言葉でしょう！」

三華「崩山彩極砲」

そこからは美鈴の流れるような演舞だった。掌底、背打とどめにアップーのような打ち上げ。そのあまりの威力と衝撃に天井に盛大に身体を打ち付けた警察官は無残にも床を転がった。

「まったく、その程度の腕でこの私に挑もうなどと笑止千万！」

笑えないのはこっちのほうだ……。

「ちよつと美鈴、一体何があつてこの惨状なのか訊かせなさい……」

「詠さん？ こいつら、今朝にもやってきて何もしていない私を何処かへ連れて行こうと掴みかかってきたりしたんですよ！ 今だつてそうですUFOキャッチャーをしていたら声を掛けられていきなり拘束ですよ。悪党にしてもしつこいです」

「今朝にもやってきた、ってまさか……」

『あれ？　またしても見慣れない服だけど……一応人間ですよね？』

そうだ、美鈴と門で出合った時にそう云っていた。

「美鈴、あんた今朝会ったとき“またしても”って云ってたわね、私が来る前に誰か来てたの！？」

「ええ、こいつらとまったく同じ服の男が一人、侵入者と思って灸を据えてやりましたよ」

なるほど、旧友の云っていた“事件”というのはコレか。

「つまり美鈴、アンタ警察に喧嘩売ってたのね……」

「“けいさつ”と云いますと？」

「街の秩序と平和を守る、正義の味方よ。ちなみに美鈴は悪党役ね」私の皮肉たつぷりの説明に美鈴も思い当たるような節があるのだろう、一息思慮をした後にぽんと手を叩いた。

「もしかして、里の自警団のようなもの、とか？」

「ご名答。それが分かったのなら何しでかしたのかも分かるわね？」

「あはは……」

美鈴の苦笑いをよそにパトカーのサイレンが近づいてきた。まさかと店内を見回すとカウンターで電話を手にした店員と目が合った。店員はびびって身構えるが何故私に怯えるのやら、そのまま店内に視線を配せると逃げなかった野次馬達が恐る恐る私たちを囲み様子見をしていた。

その間にもパトカーのサイレンが着実に近づいてくる。
要するに――

最悪だ。

だが。最悪だからと云って、はいそうですと素直に捕まるわけに

もいかない、厄介ことは少ないに限る。開き直り頭を切り替えて私は逃げるための算段を頭で整理する。恐らく風貌がバレているであろう美鈴が問題だ。

「仕方ない。美鈴、そっちのトイレの窓から路地裏に出て、左に抜ければすぐ駅だから自転車の鍵を外しておいて」

「逃げるんですか？」

「そうよ。まあ、美鈴が檻の中で臭い飯を食べたいって云うなら、両手を挙げて出て行くのも悪くないかもね」

私が自転車の鍵を投げつけると美鈴は華麗にそれを受け取る。さらに追加で鞆も投げてキャッチさせる。

「鞆もよろしく」

「は、はい。でも詠さんはどうするんですか？」

「時間稼ぎ。ほら行って！」

首をかしげながら美鈴は男子トイレのほうへと入っていった。何人かの男の罵声と美鈴の謝罪の言葉が聴こえてゲームセンターの中は静かになった。

「ふう」

丁度サイレンが止んだ。つまりパトカーが停車したということだ。私は出口のほうへ走りながら腹を決める。嘘をつくのはあまり趣味じゃないけど四の五の云ってられない。

「さて——」

自動ドアをくぐると丁度よく二人組みの警察官がパトカーから降りていたので、間髪入れずに思い切り駆け出す。

「助けてくださいっ！」

私が大声を上げて警察に駆け寄る様に周囲の学生や主婦などの歩行者から注目を浴びるが気にしない。とにかく警察官に向かって慌てる様を見せながら冷静に私は駅と反対方向を指で示す。

「いきなり女が暴れ出して……あっちのほうに走って逃げていったんです」

「大丈夫。お嬢さん落ち着いて、俺達が来たからもう心配しなくて

「いいよ」

私に頼もしい声を掛けたのは20代前半だろうか若輩の警察官だった。そしてもう一人、先輩なのだろう。中年のベテランといった警察官が横に立つ。

「先輩、ここは俺が行きます」

「いや……行かんでいいぞ」

中年の警察官が口で止めるが若い警察官が胸を叩いて主張する。
一途で単純なタイプなのだろう、警察官には失礼だが騙す側としてはラッキーだ。

「犯人が逃げたらどうすんです？ それに、一度やってみたかったですよ現行犯逮捕！」

決め台詞のように言い放って若い警察官は私の言葉通り、駅とは逆の方へと駆け出していった。そのあまりのあっけなさに申し訳なさを感じてしまうが仕方ない。

「あー馬鹿……張り切りやがって」

一方でベテランの警察官は落ち着いた様子で私の方に向き直る。

「ごめんねお嬢ちゃん、あいつ可愛い子に目がなくて馬鹿だから勘違い」とかよくするんだ。いい奴なんだけどね」

こちらの警官は手馴れた様子だ、含む云い方までする。まあ、大仰過ぎた自覚はあるのだけれど……。

「へえ、おじさんはしないんですか？ 勘違い」

私の問いに答える気も無く警察官のおじさんは後ろに停車しているパトカーに視線を送る。

「丁度俺達がパトカーに乗って向こうからやってきた。犯人は丁度俺達とすれ違う形になる」

嫌な予感がする。私はさりげなく視線を駅の方に向け、美鈴の強さなら捕まる心配は無いだろうがもし別の警察官が先回りなんてしていたら良い事にならないのは確実だ。

「少なくとも俺は走って逃げる女を見なかったからな。職業柄見逃すことはしないし……ああ、駅か？」

「っ！？」

気になって駅へ向けた私の視線を見透かされた。不意を突かれて背筋が跳ね上がりそうになるのをどうにかこらえる。

まずったなあ、そう思いながら私は気付かれないようにゆっくりと重心をずらして足を踏み込む。

警官の手が私の腕を捉えようと伸びた瞬間、猛ダッシュ。紙一重で警官の手は空を切り、私は路地へと逃げ込む。

「やっぱりッグルか！」

警官を背に私は全力で路地へ疾走する。何が入っているかの分からない破れたゴミ袋を飛び越えて、路地の奥へと駆けた。

真っ直ぐ突き抜けた先は歩道に繋がっており、正面のガードレールの先は道路。Ｔの字に分かれた歩道、左に曲がれば駅の方角。私は迷わず右へ角を曲がってすぐに回れ右、息を殺して身を低く構える。

「コラ待てっ！」

視界から消えた私を捉えるために警官の足音が速まる。タイミングを取り、クラウチングスタートの要領で身を屈めて私は走り出す。すると読みどおりのタイミングで警官が飛び出してくる。

曲がるために突き出した警官の左足が私の背中にぶつかり、警官は勢いを殺せぬまま軸を失う。当然、低く身構えた私はその衝撃にひるみながらも駅のほうへ向かって走り出した。

「なっ！？」

私の背中の上を舞うように飛んで、警官はガードレールにぶつかってしまふ。

「痛っ……！」

走りながら振り返り、警官の無事を確認する。軽く打った程度らしい。もう私を追える距離ではないと分かったのか警官はもう追いかける気はないらしく起き上がり頭をさすりながら私のほうを見据えていた。

「ったく。後で後悔するぞ、餓鬼！」

「ごめんなさいねー」

私は手を振り、そのまま手近な路地へと入り込み駅のほうへと急いだ。

息を切らした私が到着すると既に自転車置き場の陰で待つ美鈴の姿があった。

「待たせてごめん。誰かに会ったりした？」

「いえ、特に怪しい人間には」

「ならよかった」

安堵した私は早速、受け取った鞆を籠に入れて自転車を置き場から出す。

「じゃあ、さっさと行くわよ。乗って」

「あの詠さん。私が抱えて逃げたほうが——」

確かに、私の漕ぐ自転車より美鈴の足のほうが速いかもしれない。
でも——

「駄目、余計に目立つでしょ」

目立つような行動は控えるべきだ。見つからないことも大事なのだから。

「大丈夫。ほら行くわよ」

頷き、美鈴が後ろに座ったことを確認して私は自転車を漕ぎ出した。

私達は必死に逃げたが警察がパトカーに乗って追いかけてくるなんて逃走劇を繰り広げることも無く、自転車を降りて一息ついた時にその眼下には逃げ回った私の街が広がっていた。

必死に街の中心からとにかく逃げねばと、人気の無い海沿いの方へと逃げて私達は朝にたずねたこの神社に逆戻りしたのだった。

「撒けた。と思つていいのかな、これは……」

徒歩で長い石段を登りきり最上段に腰を下ろして息を整える。冬だというのに汗をかいてへとへとになつてしまった私とは対照的に平気な顔で美鈴が横に座る。

「大丈夫ですか？」

「自転車全力で漕いだ次は石段だもの、疲れないと思う……？」

「お疲れ様です。ですが警察の人間はもう追つてこないんですか」

「大丈夫よ、すぐにこんな外れまでは来ないと思うし。もしかしたら電車で逃げたと勘違いしてくれるかもしれない。来たなら来たで美鈴が私を担いで山中に逃げ込んでしまえば逃げ切れるでしょ」

「なるほど、それで街の外まで出たんですね」

「街中じや逃げてても人目があるし迷惑も掛かるのよ。といつても一旦私の家に戻ろうと思つてたのに、迂闊に街のほうには戻れないわね……はあ」

「そうですね。ですがどこかアテとかあるんですか？」

「ないわ、でもどうにか家には帰りたいからね、夜まで粘つて様子見。家まで戻れそうになれば最悪この近辺で夜明かしね」

喉が渴いた。そう思い脇に置いた鞆を確認すると幸いにもペットボトルのお茶が二本入っていた。

飲み物を買つておいてよかったと思ひながら冷えてしまったふたつのお茶のひとつ美鈴に放る。

「はい買つてきたお茶、冷えちゃったけどね」

「え、あれ……水筒？」

「キャップをね、こうして捻つて開けるの。そうすれば飲めるからなるほど、“じどうはんばいき”に入つていたのはこれだったんですね。こんな水筒に入れて売られているんですね」

ペットボトルのお茶を乾いた喉に与えながら鞆に常備していたトランプが目についたので私はネタのひとつとしてそれ取り出す。

「ねえ美鈴。トランプは知ってる？」

「それなら知っていますよ、咲夜さんが持っていましたから。確か数字と模様を使ってゲームをするものでしたよね」

「そうそう、でもね私はゲームじゃなくてこれでする手品が得意なの」

「手品ですか？」

私は慣れた手つきでケースからトランプを取り出し、それをシャッフルする。そしてそれを扇状に広げて美鈴の目の前に差し出す。

「はい、一枚好きなのを取って。その模様と数字を覚えるの、私には見せないで」

一枚美鈴がカードを引き抜き確認している隙に私は扇状の山札の形を整えながら“山札の一番後ろ”を確認する。

「覚えた？」

「はい。ばつちりと」

「じゃあ山の一番上にそのカードを置いて。そしてシャッフルするの」

云う通りに美鈴は山札の上に手に在るカードを私に見せないように乗せる。それを確認して私はそのままカードを下から割って上に重ねる一般的なシャッフルをする。

「これで私には何のカードを引いたか分からない」

「そうですね」

ある程度適当にシャッフルしたところで山を整える。

「じゃあ、言い当てるわね」

山札をひっくり返して順番に一枚づつ物色していく。そのうちに“一番後ろにあったカード”を見つけたので私はその手前にあったカードを抜き出す。

「美鈴が引いたのは、これね。クローバーのエース」

「ええ！？　なんで分かったんですか？」

示したカードは正解だったらしく素直な美鈴の一驚に満足する。

「ちゃんとタネはあるわよ。それに、これはちゃんな手品だから偶

に失敗するの」

「すごいじゃないですか。詠さんの特技ですね」

「姉が得意だったの。これでもまだまだ姉には及びようがないんだけどね」

今日はよく姉の話が出てくる日だ。私の中で気持ちが沈んでいくのを感じながらトランプをケースに仕舞って膝の上に乗せる。

「知りませんでした。お姉さんがいらっしやるんですね」

「今は居ないの。私が小学校の頃にね、死んじゃったから」

その告白に美鈴の顔がわずかに伏せられる。立ち入った話の切っ掛けをつくってしまったのが申し訳ないのだろう。

「姉が生きていたら美鈴くらいの年齢かもね」

だが美鈴はなにも悪くは無いのだ。だからこそ、そんな悲しそうな顔をして気に病んで欲しくない。

そして憐憫に満ちた美鈴の顔が私の中で十年近く掛けて塗り固めていたものを融解してゆく。度重なる過去の再起が、弱さを吐き出せと私の無意識が訴えていた。

「ねえ美鈴。私ね……この街が、この世の中が嫌いな」

「この街が？」

「姉が居なくなってからかな」

街を眼下に見据える。それが私の中では無意味に等しく感じられた。

「この世界に居ると、たまに息苦しくなるの」

「息苦しく……ですか」

「ここには窒息しそうなくらいに、何もかもが飽和してる。それが私達の生きる現実なの」

「只々、数の多い人間が。只々、居場所と娯楽を求めてひしめきあってる」

「下らないわよ。只の儘、何にも為りはしないんだもの」

「何にも成れはしないのに……」

私は眼下の街から視線を落として足元を見つめる。

美鈴は何も云わなかった。でもそれでよかった、言葉が欲しかったわけじゃない、吐き出したいだけなのだから。

「幻想郷……か」

どんな所なのだろうか、何があるのだろうか。

暮れゆく夕日を見つめながら、私は幻想に夢を馳せた。

「でも、実のところ私も弱い弱い人間なの、言葉だけ達者でも“ただ此処に立っているだけ”。美鈴みたいに心も身体も強くも無い、只の人間のひとり」

もはやそんな自虐すら虚しい、語るも無駄な自分の言葉こそが何より虚しいのだから。

「だから！　そうよ、こんな……辛いことしかない世界に用も未練も無い！　逃げてるって言うならそうよ……」

ズキリと、心が痛むのが分かった。

美鈴の迷惑も考えずにぶちまけているだけの我侭の言葉。そんな私をどう思ったのか美鈴はゆっくりと口を開いた。

「詠さんは一月も一年も、ずっと門前で立つことってできますか？」
「え？」

「紅魔館です。お嬢様は客人などそう招かれはしない方なので。門番である私は門の前で在り、立ち尽くすのが日課です。偶に魔法使いがやってきますが普段は何もない毎日です、“ただ其処に立つて

いるだけ”なんです」

「毎日、ただ其処に立つ。雨が降ろうとも、風が吹こうと、雪が降ろうとも。足が棒になろうとも立ち尽くす。これ以上の仕事がありませんか」

そんなに辛い仕事を毎日、考えるだけでも私は耐えられそうに無いし美鈴がそこまで辛い仕事をしているのだとは思っていなかった。だからこそ私の壊死しそうな心も美鈴からすればチャチな不幸だといふのだろう。

「美鈴も……辛いんだね」

「いいえ」

そう云って美鈴は笑った。それは悔しいくらいに良い笑顔だ。

「其処に居ることは辛くありません。私の立つその背中には咲夜さんやパチュリー様、もちろんお嬢様と妹様が居ます。私の背中には紅魔館の安心して過ごせる日々を背負ってるんです、これ以上の仕事がありませんか」

美鈴の言葉が痛かった、自分が惨めだった。

「だからって……分かってても納得なんかできないよ」

でもそれは美鈴の理屈、はいそうですね、と割り切れるほど私が器用なら苦悩なんか端から無いんだ。

「そうですね、人も妖怪も皆が私のように無欲ではありません。私には詠さんの辛さを哀れんでも分かってあげることではできません。でも——だからこそ私は詠さんを応援します、それは他人にしか出来ないことですから」

「……」

返せる言葉が無かった。

美鈴は卑怯だ。

私の泣き言を叱咤してくれてもよかった。慰めてくれるだけでもよかった。

そんな私を信頼して煽って……卑怯だ。

そして、そんな慈悲を期待していた私が……なによりも卑怯じゃないか。

「言い出した私が云うのもなんだけど。やめよう、こんな話」

「詠さん……」

「ごめんね。こんな勝手なことばかり。さ、私の家に行こう、今から行けば街に入る頃には夜になる」

手にあつたランプを鞆に仕舞う、そのとき鞆の中の美鈴の帽子に手が触れ、中でカサリと音がする。

何かと思い帽子の中に潜んでいたものを取り出す。出てきたのは拉げた紙の包み。

「なにこれ手紙——？」

ひよつとして朝に鞆に美鈴の帽子を入れたときから一緒にずっと私の鞆の中にあつたのだらうか。

包みを解いて折りたたまれた紙を広げると興味を示した美鈴も覗き込んでくる。

“日暮れまでに戻ること、暮れに門に居なくば門だけは帰る　八雲　紫”

紙にはそれだけが記されていた。

「むらさき？　だれかの手紙なのこれ」

私の問いにうな垂れながら美鈴が答える。

「八雲　紫^{やくも　ゆかり}。スキマ妖怪です……こんなことだらうとは思っていませんよ」

安堵からか呆れたからか、美鈴の口から盛大なため息が吹き出された。

「じゃあ、この日暮れまでに戻れば美鈴は幻想郷に戻れるってこと？」

「恐らくは……いやあ、なんとか帰り方が見つかったてよかったです」
よかったよかった。と私達は改めて眼前に広がる景色を思い直す。

「日が……暮れる」

そのときばかりはやたらに夕日が眩しく見えた。

「美鈴！」

「了解！」

跳ねるように立ち上がる私達、互いの念頭にあるのは“急げ”だった。そして、阿吽の呼吸で美鈴が私の手を引いてお姫様抱っこをされる形になる。

私には既に美鈴が跳ぶつもりなのだと分かっていた。

「行きますっ！」

「お、おっけー！」

私の言葉になんの躊躇いもなく美鈴はそのまま石段から跳んだ。落ちる落ちる。朝は重力のありがたさを痛感したが今度は重力の恐怖だ、こんなもの体験したら遊園地のフリーフォールも怖く無いだろう。

時間にして数秒、石畳がみるみるうちに視界に迫ってくる。

そして。着地などと生易しいものではない、衝突と云って差し支えない速度で地面に設置する瞬間、美鈴は合わせて息を吐き出す。

「ふっ！」

その全てのエネルギーをその脚の全てで緩衝する。だがいくらなんでも脚の全てを使っても全ての衝撃は緩衝できない。

残った衝撃は美鈴の脚ではなくその地面と敷き詰められた石畳が受け止める。そして美鈴の脚が落下エネルギーを加えて石畳に衝突してもビクともしないほどに強靱であれば、それは地面に刺さる投げ槍や砲丸の弾のように地を抉る。

そして聴いた事もない破砕音と共に石畳が割れ砕け、美鈴の足は当然のように石畳に突き立った。

「大丈夫ですか？」

「なんとかね」

地面に下ろしてもらい、眼前にとめてあつた自転車の鍵を外す。不用意に街へ向かったら警察に出会つかもしれないが仕方ないが、今は出会わないように祈るだけだ。

そして懸念事項がもう一つ、時間だ。今から私が漕いだら校門に着く頃にはとづくに夜になっている。美鈴の足で走っても無理かもしれない。それなら答えはひとつ……。

「私じゃ間に合わない。美鈴、自転車を漕いで！」

「私がですか？ ですが私は……」

美鈴は昼間に乗って扱けたことを思い出したのだろう、だがそれは杞憂だ。

「美鈴。“回れば安定する”そういうもんなのよ」

私の言葉の意図に気付いた美鈴は逡巡するが次の瞬間にはしっかりと頷いてくれた。

「分かりました」

自転車に跨る美鈴に続いて私も荷台に半身で腰掛ける。

「“バランスをとる”と“漕ぐ”を両立している人は居ない……でしたね」

ペダルを逆に回すとチェーンが音を鳴らす。そして、しっかりと踏み込まれるペダル。

「つまり、一心不乱に——前っ！！」

後輪のタイヤが僅かに空転した後にはグリップを取り戻し、急加速。自転車に乗るときに大事なのは意識を前へと持っていくことだと、私は教わった。

進む前から悩んでいたら前に進まない。前に進んでから悩んでもいい。つまり、“無謀と鉄は使いよう”だ。

大丈夫だ。今の美鈴は倒れない。そんな確信に近い信頼が私には

あつたのだ。

耳を吹き抜けてゆく風の音が一際冷たい、もう夜が来るのだ。乱れる髪を掻き撫で、半身で荷台に乗る私の目の前では同一方向に走る車が併走をしていた。それほどまでに美鈴の駆る自転車は疾駆していた。

自転車とそれに乗る私たちの影が道路まで伸びる。影を見つめる、自然と私の視線は下へと向いていたのだ。神社での会話のせいで切り替えよう、いつものように表面だけ割り切ろうと訴えかけても、私の心は鉛のように沈んで動かない。

そのとき、自転車を漕ぐことに余裕を持ったのか、海へと首を傾けながら美鈴がこう呟いた。

「云ってましたね詠さん。ここから眺める夕日が好きだって」

「え？」

「夕焼け。綺麗じゃないですか」

ユウヤケ。単語でなく音として解釈してしまった私が素っ頓狂な声を上げるなか、何故だろうか。その言葉に沈んだ私の奥底で心が高鳴る気がした。

私は背中に感じる夕日の光と暖かさを思い出して振り返る。

「あ……」

思わず声が出た。

眼を見開き。寒さとは違う改めての鳥肌が私を包む。

幼い時、心奪われたその景色が何一つ変わることなくそこに在ったのだから。

それがなによりも——悔しかった。

理解しなくなかったのに、理解してしまったことがじゃない。

「私がこんなにも無彩色の瞳しか持てなくなったのは……そうだよ
ね」

言い訳などしようもない。私は悪くない、世界が悪いなどと云えるはずが無い。

夕日があんなにも美しいのだから。

そんなことにすら気付けなかった私が……悔しかった。

自分が変わったことを認めず、誰かのせいにして私は“子供”だ
と言い訳をした。

「気付かなければ。そう、わがままを垂れ流していられたら良かったのね。責任なんてまっぴらよ」

そして言い訳をしている自分に気づけるくらいには、私は大人になっ
てしまった。

子供の頃に見たこの景色を忘れてしまいうくらいに……私は大人になっちゃったんだ。

それでも紅い紅い夕日が眼に焼きついて離れないのだ。

「暮早し 茜の海風 ふるゆるはその身か心か」

私の口から滑り落ちた言葉の羅列に美鈴が首を向ける。

「和歌ですか？」

「ううん、そんな大層なものじゃないわよ。 “ただなんとなく” 詠んでみたくなっただけ」

“詠”なんて大層な名を名乗る私なのだから、ひとつくらい無知蒙昧に詠ってやろう。

嗚呼、なんて綺麗な夕日なんだろうか……。

自転車のタイヤがアスファルトを滑り、ブレーキの甲高い音と共に自転車が停止する。どうにか、日暮れまでに学校の門前にたどり着けた。

校門脇に自転車を停めて美鈴と共に門前に立つ。

私達の眼前には大きな大きな門。それは、古めかしく中世のようなデザインで。私の身の丈よりも何倍も大きな鉄の格子がそびえ立

つ。

雨ざらしにされたであろう痕跡は見せつつも脆さは見せないその堅牢さは、在るだけで威圧を与えるかのよう。そう、たった一日だったけれど私の人生を変えるきっかけとなった場所だ。

「さて……八雲紫やくもむかりっていう妖怪さんは何処にいるの。見当たらないようだけど」

「手紙のとおりなら居る筈なんです。まあ、あの妖怪は決して律儀な妖怪ではないので信頼できませんが……」

まさか遅かったのではと脳裏によぎるが門はこうして立派なままに建っている。なら何故居ないのだろうか？ 手紙は出鱈目だったのかはたまた日付が今日ではないのか、そう思う内に門を照らしていた夕日が沈み街が世界が闇夜に包まれてゆく。

ジジッと独特な音を出して門前の外灯が夜の黒を照らし穴を開ける。すると其処には先ほどまで立っていなかったはずの女性の姿が照らし出された。

「あら、夕暮れにはまだ早いと思っていたけれど、忘れていたわ。こちらは師走だったわね」

間の抜けたような言葉に……これはまた派手な服だ。彼女が一目で幻想郷の住人だと分かる、此方にあんな格好の人間が居るわけが無いのだから。

ドレスを陰陽師の服にアレンジしたかのような形の服、色は紫色と白色、紫色の垂れには易。八卦の模様だったかな。“沢”の下に“地”の沢地萃。お祭り騒ぎでもするつもりだろうか。ポリウムのある金色の髪を結い上げて赤リボンの付いた帽子を被っている。とどめに大きな日傘を携えて大きなあくびをひとつ見せてくれた。

一見すればコスプレイヤーにしか見えないのは美鈴と同じく仕様なのだろうか……その外見だけでなく女性からは美鈴には無い練り出される様な違和感があった、常識を捻じ曲げるような雰囲気など

と意味の分からない形容だが素直にそう感じる。

「紅魔館の門番。名は——何だったかしら？」

「紅 美鈴です……」

「霊夢がどうにも我慢弱くてね、話をしていたら遅くなったの。文句があればあの子に云って頂戴」

「貴女が美鈴の云ってたスキマ妖怪？」

確か“八雲紫”だったか、美鈴はそう呼んでいた。

「初めまして人間。私に問うのなら名乗りなさい、だけれどその前に己に問をなさい」

いきなりだ。どうにも幻想郷の住人はどこかネジが外れてるのだから。

「不躰な物言いを自問する気はないの妖怪さん」

負けじと私も強めの口調で言い返すと八雲紫は眼を細めて僅かに口を吊り上げた。

「その眼よ。世界を見下すような瞳。確かに世界など無価値だけだ。無価値の価値を見出す以前に放棄するあなたに美德は無いのでなくて？」

その瞬間——

「へ？」

形容のし難い、この世のものとは思えない吸い込まれるような不可思議な音を出して足元が“地面が口を開けた”。

比喻でもなんでもない、文字通り私を喰らわんと地面が大口を開けたのだ。浮遊感、そして私の身体はその地面の口に丸呑みにされた。ありえない。だが、その時ばかりは驚き以上にそこに広がる未知に対する恐怖感のはるかに大きかった。私の知りうる常識に絶対的な概念が裂け割り込んでくる。何も在って全てが無い、そんな一

瞬だった。そして、只の一秒ほどで私は元の世界に吐き出された。

視線が定まらない、私は放心していた。一体何が起きたのか、それを問うことすら忘れて現実の実感を確かめていた。重力が私の身体を引っ張ってくれる。打ち付けた身体が地面を教えてくれる。世界の制約が私を繋ぎ止めてくれる。だが、現実よりもっと下層の妄想、なお概念的な何かに晒されて確かめる世界の虚ろに身が震えていた。

「大丈夫…… 大丈夫だから私」

無条件に震える身体に言いきかせるが震えは止まらない。あの中は身体に制約された者の入るべきところじゃない。あまりに単純な絶対が自我の世界を否定してくる、苦笑いをする余裕すら残してくれない。

「美味しそうな人間ね。門番さん」

何が起こったのだろうか。ようやく思考が戻り、しっかりと気を持つて面を上げると格子越しに美鈴の背中が見えた。そして八雲 紫がそこに対峙している。つまり私はあの一瞬で数メートル後ろの門の中に閉じ込められたのだろうか。冗談じゃない、まるで手品だ。

「美鈴……？」

格子越しに美鈴が身構えるのが見えた。

「下がっててください、あれはどうせろくでもないことを考えます」

「何ておいしそうな人間かしら。今宵のディナーにぴったりだね、門をこじ開けて。ひっ捕らえなくちゃ、ね」

一步。ゆっくりと八雲紫が門へと歩く。

私はあえて門の内に置かれた。そして八雲紫は門を開けると云う。回りくどい。だからこそ、あの妖怪はゲームをしようとしているのだろう。

さらに一步。その重みも無いただの足音に私は恐怖を覚える。

私は理解したつもりで知っていただけだった、実感が無かった。アレは人を喰う“妖怪”なのだ、人外の外法を持つ何かなんだと。

それを前に私には震える我が身を止めようと強く自分の身体を抱き止めることしか出来なかった。

「大丈夫ですよ」

その時だった。流れるように、私の視界に見覚えのある背中が現れる。背中の主、紅魔館の門番。名は紅　美鈴。

背中とは門の真正面に腕組み、何も云わず仁王立ちをする。戦いに挑む彼女の背中がまるで別人に見える。流麗で力強い、しなやかな力強さを体現していた。

「……」

「格の違いは承知よね」

滑稽な見世物でも見るかのような眼で私達を見つめて嘲笑する。

だが美鈴はその嘲笑を一蹴する。

「格に違いはあっても、門の番人として敵に違いなどありません。

そして、詠さんを巻き込むのであれば貴女といえど敵に違いありません。それに——」

ズンツと地が揺れた。震脚と云うのだろうか、それは目に映る世界そのものが揺れたかと錯覚するほどに強い踏み込みだった。

「今回の件の礼も兼ねてますから」

その揺らぎの無い声が私の不安を和らげてくれた。美鈴よりも紫のほうが強いのというのは私でも分かっってしまう、それでも彼女の身様が私の震えを止めてくれた。

その時だけは。美鈴は、彼女は門の番人なのだと、心から信じられた。

五話

いつからこんなことになったのだろうか。

門の前に居た迷子。神社に訪問、街を歩き回って警察から逃げて…… 帰る方法が分かったからと戻ってきたら、コレだ。

流れるような動作で美鈴の四肢が八雲紫へと襲い掛かる。私の目の前では美鈴の一方的な猛攻が行われていた。

いや、一方的と云えば美鈴が優位に聴こえるが八雲紫はただ遊び半分に避けまわって手を出していないだけだ。

だが、決して美鈴が弱いわけではない無駄の無い動き、その一つ一つが相手に打ち込む為の動き。

そして有り得ない、発勁の出来ない勁道の通っていないような運動であるうとも美鈴の節からは馬鹿げた勁が生まれている。肝心の発が相手に届いていないが、あれが“ 気を操る ” ということなのだろうか？

そのとき、八雲紫を狙った美鈴の拳が校門の壁を撃つ。すると私の側、つまり内側からみてすり鉢状に、破壊でなく“ 粉碎 ” されてしまった。

浸透勁。あの拳はフルメタルジャケットじゃない、ホローポイントなのだ……。

と、まあ冷静に思索してみたが、どうやらこの戦いはそういう次元では無いらしい。

美鈴はなにやら虹色に輝く投げナイフのような弾幕を投げつけ、抱えるほどの光る気弾を手から繰り出していた。

ああ、地面から謎の空間に落とされたときからそんな気はしていたさ。そうだ、彼女らは現実的な思考が馬鹿らしくなるような世界

の住人だ。

ただ、云わせて欲しい。

——そんなことするならゲームの中でやれと。

私が心の中でツツコミをしていると、いつの間にやら二人の戦いは間を置いて膠着していた。

「まったく！ 人を小馬鹿にしたような真似ばかり。少しくらい攻撃してきたらどうです」

八雲紫が攻撃してこないことに痺れを切らして美鈴は負け惜しみとも取れる徴発を言い放つ。

その言葉に反応したように八雲紫はクルリとその場で回り、美鈴に背中を見せる。

「それじゃあ……」

そしてそのまま去るかの如く一步踏み出す。

「ちよつとだけよ」

八雲紫の言葉が確かに美鈴の耳の裏を撫でた。美鈴にとって目の前に居たはずの紫の言葉は美鈴の背中から聞こえていた。

「！？」

緊張か恐怖か。いや、感情ではない。反射的に背筋を跳ねさせたのは一瞬、次の瞬間には振り返りながら美鈴の鋭い裏拳が空を切った。

「え——！？ がぶっ」

美鈴に話は聞いたがあれが“境界を操る程度の能力”の一端、スキマという物なのだろうか。八雲紫はその半身ごとパクリと地面にできた裂け目へと沈み裏拳を避けていた。そしてもうひとつスキマが展開し紫の脚が飛び出すのかと思われたが飛び出したのは見慣れた道路標識。それが鋭く美鈴の顎を打ち抜く。

見事に打ち上がった美鈴の身体はそのまま後ろに飛び、右手のみでバク転をして着地をする。その様子から自分から後ろに跳んで致

命傷は避けたようだ。

「これしき、ふ——」

「はあい、次」

“開けて悔しき玉手箱”

着地をした美鈴の直上から間髪も無く今度は馬鹿にでかい墓石が降ってくる。もう滅茶苦茶だ。

「喋らせなさいよお！」

“紅砲”

一瞬の溜めの後、直上の墓石に渾身の拳が打ち込まれる。

衝撃。落下の勢いすら残すことなく墓石は崩壊し美鈴の拳の方向へと破片を散らした、まるで雨が降るようにだ。

「これしき、不意打ちが来るのだと解っていれば警戒の仕方もあるんですよ！」

「お莫迦さん。不意なんてものは、貴女が注意不足なだけ」

八雲紫がツンと日傘の先で空間を小突いてやると、傘の先端から複数の光弾が打ち出される。五つの弾は光の尾を引きながら直進していく。

美鈴は蹴り出すように虹の渦を叩き込むと光弾は渦に呑みこまれて消滅する。

“螺尖歩”

間髪入れずに軽い踏み込みから気を込めた拳を突き出し飛魚の様に前へと跳ぶ。

自ら放った虹の渦中を突き切りその拳は相手に叩き込まれるかに思えた。

“ 幻想狂想穴 ”

拳が触れる瞬間、ぱくりとスキマに喰われた八雲紫が平然とその真後ろに姿を現す。当然拳は空振りだ。

「鬼さんこちらよ」

「あーもーあっちへこっちへと！」

またも日傘を使って今度は地面スレスレを軽く薙ぐ、すると先ほどと同じような光弾が打ち出される。だがさっきとは様子が違う、単発でしかも尾は引かずに地面を這うようにしてソレは進む。

当てる気のないかのような弾を警戒する前に美鈴はソレを飛び越そうと地を蹴る。そのとき、光弾が垂直に子弹を次々打ち出し上を通り抜ける美鈴に襲い掛かった。

「む……！」

空を蹴って加速、子弹をスレスレのところできり過ぎ、美鈴は光弾を飛び越えてなお八雲紫の懐へと飛び込んでゆく。

「もらった！」

閃光。

美鈴の身体を切り裂くかのように横薙ぎに光が走った。

「？」

だが何も起こらない。何かが当たったような様子もなく外傷もない。美鈴も一瞬身体を強張らせたが何も起きないのならばと八雲紫の懐へと拳を振りかぶって飛び込む。

が、次の瞬間。

何かを切り裂くような音と共に美鈴の身体が後ろに吹き飛んだ。コンクリートの地面に受身も出来ずに叩きつけられ慣性で美鈴の身体が転がる。相手の攻撃をはじめてもろに喰らっていた。

「美鈴！」

私の声に美鈴は私を制止するように後ろ手を見せる。

「まだまだあ……一発喰らわせなきゃ気が済みませんからね」

気合を入れなおして立ち上がる美鈴。退屈そうに、それでいて妖しく八雲紫が目を細める。

「そんなに近づきたいなら、良い案があるわ」

いつの間にやら手に在った一枚のカード。美鈴に幻想郷の話をしてもらった時に聞いたものだろう。

弾幕ごつこと呼ばれる試合においての中核であり興とも呼ぶべき要素。“スperlカード”

カードを人差し指と中指に挟み掲げる姿は慣れたもので、テレビのチャンネルを変えるような気軽さで八雲 紫は宣言する。

結界「魅力的な四重結界」

足元に妖しく光る方陣が浮かび上がる。ネオンで描いたようにも見えるが、ぼくと光るその幻想的な光は人工の光ではない。

方陣はゆつくりと八雲紫を中心に廻る、それはゆつくりと収束し足元の陣が消えたときをスperlブレイクと云うらしい。

「ほおら、遠慮しないで」

宣言に対して警戒を強める美鈴を他所に八雲紫は右の手のひらを無造作に翳す。その手のひらから地面の方陣とは違った陣が大型のパラソルほどの大きさに広がる。

翳された手のひらを中心として正方形が四枚。二枚が一体となり星型となって回転しているその中に正八角形がある。

そして、二枚づつのそれらが相反するように逆回転をしあい幾何学的な結界を展開させていた。

「——っ!？」

結界を前に美鈴に異変が起きる。

何が起きたのだろうか、ズルリと美鈴の足が前へと滑りだす。その異変を体感した美鈴は重心を低く後ろへと踏ん張った。

風など無く周囲の草木も微動だにしない。ただ、美鈴はその身体全てで何かに逆らっている、彼女にだけ不可視且不可思議な力が作用しているその様はまるでパントマイムのようにその様こそ不可解に見える。

私はその様を疑問に思ったのは一瞬ですぐに何が起きているのかは理解できた、美鈴はあの四重の結界に引き寄せられているのだとその結界は掃除機と云うべきか蟻地獄の巣だろうか。魅力と名づけたその意味の如く、美鈴は惹きつけられるように引き寄せられてゆく。

「怖いでしょう。結界は凡てを別ち、貴方を否定するの。境界の前に貴方は平伏す他を知らない。無力を知るだけは辛いでしょ」

「ええ、確かに、ですが……そう。いいえ」

そう云って美鈴は笑った。

「此処に居ることは辛くありません」

私はその言葉に心が奮い立つのを感じた。胸の奥が鷲掴みにされたようにギュツと痛かった。

次の瞬間、美鈴の後ろにかけた重心が一瞬の溜めの後、前へと跳ねるように飛び出した。

血迷ったのか。美鈴は四重の結界へと勢いのままに衝突する。

結界に拒絶される痛みが身体を奔る、その最中。美鈴の身体はその意思の下に動いていた。

左手を広げて結界にあてがう、すると丁度結界越しに両者の手が重なる。同時に右腕を構えて親指だけを折り四指を伸ばす、ありつたけの気を集中させ美鈴の右腕は突刺の為だけの槍となる。

「一心不乱に、前へ……」

右足が下がり地を磨り潰すが如く踏み込む。

「でしたねっ……！」

打突——閃光！

目も眩むそれは一瞬。光が霧散して再び電灯の光が照らす時、すでに勝負は付いていた。

四層にも積層された結界。見るだけでも強固であろうソレを貫いたのはただの貫手。

美鈴の渾身の一撃は結界を貫通し八雲紫の右手首を掴んでいた。

「……」

——だが、しかし。

「貴女の何がこうまでさせるのかしらね。妖怪のクセに」

だらりと美鈴の身体が脱力のままに崩れる。そこに彼女の意識は無かった。

だが、彼女の右手は挺でも動かない万力のように八雲紫の右手首を掴んでいた。意識は無くとも意思を示す、それは奇妙な光景だった。見たことは無いが死後硬直というものはこんな具合なんだろうか。

「結界貫通させたショックで気絶しちゃうなんてね、これは貴方らしいのかしら」

八雲紫の腕が美鈴の腕を振り払う。すると美鈴の身体は支えを失い脱力のままにその場に倒れこんだ。

「決着ね」

つい——と八雲紫が私に首を向けて微笑んだ。その微笑みは私にとって死ぬということに直結する。

悪魔の笑みだ。いや、妖怪の笑みだ。そんな冗談が頭に浮かんで笑いがでた。こんなことになるならナイフの一本でも鞆に忍ばせて置けばよかった。などと無闇な後悔をするしかない。

自分がいかに馬鹿で愚かしかったか、それをいまなお実感したの

だ。自分を嘲笑するための乾いた笑いに涙が滲む。

私は食料として屠殺されるのだろうか。

私は殺される？

「やっと、思い出したのに——馬鹿だよね私」

あの頃の。夢を見ていたあの頃の思い出もあの夕日も思い出したんだ。

私が間違っていたんだって——気付けたのに。

世界に踊らされて、ただ怠けて、斜に構えて、溜めに貯めたそのツケをいま払うんだ。きっとそうに違いない。

何で私はこんなにも無力なんだ。死にたくないよ。そう叫びたかった。だから——

私は叫んだ。

ありったけの声でただ咆えた。夜を切り裂けとばかりに、世界の全てに私の反抗が響き渡るように。

これでもかと肺が空になるまで叫びあげた。

叫び終わると格子越しに八雲紫が驚き半分に顔をしかめていた。自分の声が僅かに遠くで響くのを耳に、ふうと一息つく。憑き物

が落ちたように頭の中の雑念が消えていた。何もかも全て洗い流されてしまった。

私の中で埃を被っていた全てのスイッチがオンになるような、そんな風が突き抜けたような気分だった。

もう、私は大丈夫だ。

もう、恐くない。

「私と勝負よ——八雲 紫」

私の顔は勇ましく笑っていた。あんなに恐ろしかったのにだ。鞆からトランプを取り出し山から無作為にカードを引き抜きそれを構える。

「勝負？」

少し訝しげに八雲紫は眉を動かす。

「私が相手になるって云ってるの。人間様嘗めたらどうなるか教えてあげるわよ」

「嘗めたつもりは無いのだけれど。期待してもいいのかしら？」

「応えましょうか？」

「……」

「……」

僅かな緊張のまま、私達の時は停止したかのような静寂を生む。数秒の間をもって。ふと、八雲紫の妖しい笑みが一際大きく笑いに歪んだ。

次の瞬間、八雲紫は耐え切れなかったように噴出す。その場で腹を抱えて笑い出してしまった。

大笑いだ。

「なによ！人が真面目に——」

言いかけた私の真上から美鈴の身体が降ってくる。

「え！？　ちょ、ちよつと——」

そのまま押しつぶされそうになりながらどうにか美鈴の身体をキヤッチして地面に尻餅をついた。

「先に門を直すから。そのうちに叩き起こして別れを済ましておきなさい」

先ほどまでの様子が嘘のように。何事も無かったように、八雲紫は淡々と門の修復を始めた。

何だ、私を喰うというのは冗談？　そうだったのだろうか？

冗談にしては真に迫っていたように思えたのは私が未熟なだけだったのか。

とりあえず、目の前の美鈴の無事を確認して私の緊張の糸が切れて一気に気が抜けた。

目の端に映る散らばったランプに顔を伏せる。思い出して顔から火が出そうだった。

何で八雲紫なんか喧嘩を売ったんだ。

馬鹿だ私は。酔狂にも程がある、なんであんなこと云ったのよ…

…。

こんなものじゃあ、切れてせいぜいキュウリだ。

「はぁ……」

ため息混じりに、安堵と“満足”の笑みが漏れた。

「美鈴。ほら美鈴。起きて？」

気付けにと美鈴の軽く頬を叩いてやると、僅かな反応の後に瞼がゆっくりと開く。

「え……いさん——っ!？」

意識がはつきりしたのだろう。美鈴は目を見開き、跳ねるようにして起き上がると即座に八雲紫を捉えて身構える。

だが、美鈴の目の前には門の修復を終えた紫が素っ頓狂に立っているだけだった。

美鈴の中ではまだ戦いが続いていたのだろう。すぐに場の空気気が付いたのか美鈴の顔が私と紫の顔を交互に行き来するので仕方なく私が答える。

「負けよ負け。私達の惨敗」

「え?……え?」

状況把握のできていないその様子に、一拍の間を置いて私と紫がくすくすと笑ってしまう。

「私が拾い喰いなんて無節操な真似をと思ったの?」

紫の言葉で理解したのだろう。構えを解いて安堵とそれに対する悔しさを脱力で示す。

「……まったく、“くえない”妖怪ですね」

「お褒め頂き光荣よ。さあ、戻るわよ」

紫がパチンと指を鳴らすと私と美鈴の真横に裂いたような大きな切れ目が口を空けた。

スキマ。それが美鈴の帰路だった。

「ねえ妖怪さん、この先は幻想郷なの?」

「ええ、そうよ」

「……」

何も語らず、私は無意識にその“スキマ”に手を伸ばす。

この先には何があるのだろうか、美鈴の云うとおり人妖入り乱れつつも和やかな日々があるのだろうか。

「詠さん」

その手を美鈴の手がとり握手をする。

「今日は本当にありがとうございました。こんなに素晴らしい毎日を過ごしているんですもんね。私は羨ましいくらいでしたよ」

握手した手を上下に振りながら。ほんの僅かに悲しそうな満面の笑みが私に向けられていた。

その優しさが、その疎外感が。

「——そう、気に入ってもらえてよかった」

嬉しくて、それでいて寂しくて。涙が溢れそうになった。

それでも涙は流さずに、私は悪いものを吐き出すように大きなため息をつく。

「そういえば幻想郷には冥界があるんだっけ？」

「冥界ですか。最近事件があって結界に穴が開いて行き来し易くなったと咲夜さんが云っていましたけど」

「そっか、もしも姉が居たらよろしく伝えておいてくれないかな」

「私は門番なのであまり動けません、善処しますよ」

「姉は“タネ無し手品”が得意だったんだけどね、他に特に覚えていることはないの……ま、こんな特徴じゃあ分からないよね」

「……」

僅かに。見開いた目はすぐに瞬き、先ほどの瞳が私を見つめていた。

「詠さん。お姉さんの葬式には出られたんですか？」

「いや、両親が嫌っていたからかな、葬式すらしてなかったよ。私は死に目も会えなかったんだ。妙な話でしょう」

「……そうですか、もし会えましたらよろしく伝えておきますね」

「お願いね」

「それでは……」

「うん」

一陣の風が舞い、彼女の紅の髪が乱れた。
美しくしなやかで、優しくも強かで。愚直で素直な、紅魔館の門番。

彼女の大きさが羨ましく、甘えてしまいたくなってしまうほどに私には心地よかった。

紅の髪を揺らす、その一言は美しい鈴の音のように……。

「さようなら」

無粋だ。そう思ったから私の答えはこうだ。

「またね」

私の返事に笑みを返し、するりとスキマの中に美鈴の姿が消えていった。

スキマが閉じて残るは紫のみ。彼女も自分のスキマを開いてその中へ入ろうとした所で、ふと動きが止まった。

「ああ、そうそう」

まだ何かあるのか。八雲紫は振り返って私にこう云った。

「本当は食べるつもりだったのよ」

その言葉に私は肩をすくめて苦笑いを返してやった。

「良い眼だったわ、人間はいいわね。“よく”も短き人生を大切になさい」

そして――

音もなく。

あっけなく。

幻想達は幻想の中へと帰っていった。

「まったく――」

散々な一日だった。

美鈴との別れから数日後。

私は校長室へ呼び出されて停学処分をくらうことになった。警察との悶着をしたのがばれたらしい、当然といえば当然。罪状は公務執行妨害だそうだが結果的には嚴重注意とともに停学という形に収まった。

警察によれば事件の当日に欠席していた学生をチェックしてあつというまに私に当たったらしい。“後悔するぞ”と警察官が云った意味がよく分かった。

だが、この結果に後悔は無かった。むしろ好都合だったのだから。

その翌日、私は退学届けを学校へ提出した。

親には“自分の為の時間が欲しい”と云ったら案外あっさり、だが半ばあきらめ気味に了承をしてくれた。

学校を辞めて、私は無駄にあつた貯金を全て引き出して旅行用のスーツケースを買った。頑丈でとびきり大きい奴だ。

それに荷物を詰め込む。人が生きてゆくのに必要なものをとにかく詰め込んだ。

もっと、世界を見てみたい。あの夕日のような、眼に焼きついて

離れない景色が沢山あるのだろうから。

もつと見たい。素直にそう想ったのだ。

別に今生の別れにするつもりは無いから、知人や家族への挨拶もそこそこに私はデカイ旅行ケースを引いて街を後にした。

海沿いの道に立つと美鈴のことを思い出す。

今もそうだ、風が冷たい、十二月の寒さが身に染みる。だが、その冷たさが心地よい。

そう、冬の寒さが気にならないくらいに心地よかった。

「さて、いこうかな」

重たい旅行ケースに相反するように軽やかな心持のまま、私は歩き出した。

“道行く先は真か幻か、なれど眼に境界は非ず”

幻想郷と外の世界の門が入れ替わる事件より一夜明けて、紅魔館の門は元通りの様相。門番である紅 美鈴も無事に戻り、門を留守にしたお仕置きを受けて事件は幕を閉じた。

「はあ…… なにもパチュリー様まで一緒になってお仕置きしなくても…… あいてて」

「こつぴどくやられたみたいだな。偶の休暇を貰ったんじゃないかったのか？」

声の方へと美鈴が見上げると、青空から白黒の色をした魔女が降りてくる。

「誰からそんなことを訊いたの」

「昨日来たら門番が居なかったぜ」

「ああ…… そうか」

なるほど、と美鈴は心中で手を叩く。パチュリー様が不機嫌だったのは目の前の白黒が原因だったのだ。

「休みがもらえるなんて、門番も暇なんだな」

「そういうアンタが来るお蔭で暇じゃないのよ」

「仕事があるのはいいいことだぜ」

早速と魔理沙がミミ八卦炉を取り出し弾幕ごっこを始めようとするが美鈴は用事があるらしく慌ててそれを止める。

「ああ、待った待った。アンタを人間と見込んで訊きたいことがあるの」

「見込まれなくても人間だぜ」

「毎日毎日の繰り返しを“つまらない”と思ったこととかない？」

「いきなりなんだ？」

「少し、価値に悩んだ友人がいましたね」

「価値なんて求めるほど、不器用じゃないぜ」
平然としたその答えに美鈴は納得をする。

「門前の小僧習わぬ経を読む。ですが門の前に立てるとは限らない、心構えというものが大事ですからね」

「門前に居るのはお前だろ？」

「意味分かってないでしょう」

「意味なんて求めるほど、不器用じゃないぜ」

「アンタほど不器用な人間も見た事無いけどね」

漫談は終わり。その合図の代わりに美鈴は拳を構える。

「さあ、今日の門は一味違う。番人は仁王の如く！貴様の鬼門となつてやる」

「お前一人で二王なのか」

「それくらいの気概よ！」

一方その頃、門の悶着を知る由もなく、紅魔館ではいつものティータイムが行われていた。

その日のティーテーブルはいつもと少し違い、主であるレミリアだけでなく図書館の主であるパチュリーの姿もあった。

「ずいぶんところ酷く叱ったものね」

お仕置きを指したレミリアの言葉にパチュリーがコホンと咳を払ってから答える。

「当然。持っていかれた本にはそれくらいの価値があったもの」

「ロイヤルフレアくらいの価値ですか」

「ええそうよ」

準備のできた紅茶をテーブルに並べる咲夜。そういえば、と頼杖

をつきながら興味深そうにレミリアが問いかける。

「咲夜。さつき門番から受け取ったものは何だったの？　ちなみに私たちはコレ」

そう云ってレミリアは霊夢を模した生首の人形を取り出す。倣うようにパチュリーも本から目をそらさず魔理沙を模した生首と取り出してボタンを押す。

“ ゆっくりしていつてね！”

「私はコートを貰いましたが」

「着るものだったの？」

「はい。外来の品だそうで、昨日が寒かったのでありがたく貰っておきました」

「寒いのなら湖の氷精を退治させたらどうかしら。それこそ門番に少しは違うかもしれないわ」

「無理じゃないでしょうか、ウチの門番はどうにも詰めが甘いですから」

「でも、うちでアレほど門番に向いている者、あれほど器用な妖怪は居ないわ」

「そうでしょうか？」

「もしも、咲夜が門番になったのなら、偶の来客が無くなってしまっうわね」

「本来はそうあるべきです」

「そうあって欲しいわ」

被害者であるパチュリーの言葉を他所にレミリアは席を立ち窓辺に歩み寄る、元に戻った紅魔館の門を眼下に眺める。

「こんな所だからこそ、門は緩めのほうがいいのよ」

次の瞬間――

轟音。聴き慣れた魔力の咆哮が外から響き館を揺るがした。

「——はあ」

吐き出す吐息で“またか”と云ったパチュリーは椅子から立ち上がり、早足気味に部屋を後にした。

レミリアの横にゆっくりと咲夜が並び門を眺める。

「些か緩過ぎでは？」

レミリアが眼下を見直すと開かれた門にダウンしている美鈴、そして星型の弾幕が散っていた。

「……否定はしないわ」

完

五話（後書き）

筆が遅いです。作者です。

サラサラ書ける人がうらやましいです。創作物って何にしても自己顕示と自己啓発。なにより自己暗示とか色々自分との戦いです。生みの苦しみというものでしょうか、

文の書き方とか、どうも斜に構えつつ洒落た文章のほうがカッコいいんですが熱の入った文章になりがちです。6：4くらいで青臭さが勝っております。若さゆえの過ちとはあまり思いたくないです、できれば若さゆえの経験と言い訳します、それくらいには大人です。

子供の頃、映画にしろゲームにしろ、何より小説にしても生活にしても、何気ない一言が印象的でした。そりゃあもう人生を変えてくれるくらいには印象的でした。

白飯のおにぎりが一番美味い。と祖母の言葉を聞いた私はその言葉の魅力に取り付かれて塩と海苔を巻いただけのおにぎりを幾つも食べてました。今思い返してもおいしかったです。

ただ、意味がまったく分からない言葉も好きでした。子供心として単純に格好良かったんでしょう。ですが成長した今、言葉を感じただけでなくそれを思い直せば虚しいもんだったり。

どうせなら格好良くて意義のたっぷりある台詞を喋らせたい。

しかし言葉に意義を持たせることは簡単だけど相応の重みを持たせるのは難しい（私だけかも知れませんが） 例えば幼稚園児が「お酒は温めの燗がいい」とか言っても重みがありません。その点でZUN氏の生み出した東方のキャラクターは不思議なもので霊夢が「お酒は温めの燗がいいのよ」と言ったら納得してしまいそんな魔

力を秘めています。

なんでかな。と考えてみればSTGという性質上か会話自体が短く結果的に口数が少ないんですね、それにラスボスと1ボスと会話のノリが変わらない。ラスボス前に「お前を倒して幻想郷の平和を守るのよ」とか霊夢が熱血なこと言ったら驚きです。そんな緩急の無い、短くも独特な会話をする幻想郷の住民方は可愛くもあり重みのないようであるような気がする台詞が良く似合います。

余談もそこそこ。作品の話に入りましょう。

本作に込めたテーマは「無価値の価値」と「前へ」という二つです。

いつか世の真理に悩み、世界の無価値に気付くとき。

無価値の価値を見出すことこそが人の生き方だと。

そして、無力さへの恐怖が完璧を目指す信念か、立ち止まってしまったのならば。

一心不乱に、無知蒙昧でも、確かな前へ。

総括として詠と詠夕鈴という物語の答えです。これ以外にも詠自身の成長とか色々がんばりましたが、巧く描けていたかは視聴者の感じられた次第ということ。

詠夕鈴で私なりにやれることはやったつもりでしたが、経験不足故に文章も安定せず至らぬところが多々ありました。ビジュアルノベルという形式で魅せる以上その演出に甘えるのは可能です、個人的には文章単体でも映える小説にもなるシナリオを書きたかったのですが。結果としては映像よりの文章になったな、と。映像があると思うとつい演出が浮かんで甘えてしまいます、基本がしっかりしてないのに横着すんなよ私。

内容も少々説教くさい文になっているのはまだ若いからでしょうか、なんだか吐き出したい毒が沢山あります。毒が抜けると熟成された文章になるんだろうなと期待してます。どうなるかは分かりませんが……。

——願わくば。私の物語が何処かの誰かの人生の糧になればいいなど。そう願えるくらいには子供です。

“詠夕鈴” 作者より。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4587i/>

詠夕鈴

2010年10月8日12時45分発行